川柳雜誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.310

昭和廿二年七月二日第三種郵便物認可
昭和廿八年三月一日発行第八卷第三號（毎月一日一回発行）
創刊大正十三年・通巻三百十号

三月號

三月号目次

昭和二十八年

題字……麻生　路郎
表紙……米田三男之介
扉・カット……松井　章

川柳から観た醫者の内幕……生々庵・方正
聴診器のいらぬ前額部診察……北川　春巣…(一八)
哀妻物語……東野　大八…(二〇)
雪の或る日に……河村　日満…(二四)
初期代と江戸通貨……阿達　義雄…(三〇)
二年生……木村　水堂…(二六)
私の柳友……豆秋・三司…(三二)
近頃娘気質……麻生　梨里…(三三)
飛燕往来……(三六)

社の黒板……(三六)

★

不朽洞句帳……麻生　路郎…(一三)
近作柳樽……麻生路郎選…(二四)
川柳塔……麻生路郎選…(二六)
同舟近詠……諸　家…(二一)
一路集「勘定」……土井文蝶選
「船」……築山快夢起選…(一九)
各地柳壇……(三三)
不朽洞会から……(三七)
柳界展望……(三六)
編輯局にて……(三七)

大阪名菓

もなか民かまご

源氏の最中

百貨店著名菓子店にあります

大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九

民かまど本舗

電話㊻三四〇九

本社三月句会

時—三月七日（土）午後六時

處—大阪市天王寺区下寺町二丁目
（市電下寺町・日本橋三電停前下車）
於　光明寺

題—「筆まめ」・「窓口」・「愛妻」

柳話　麻生路郎

對談句評——戸田古方・水谷鮎美

来会歓迎・鉛筆持参

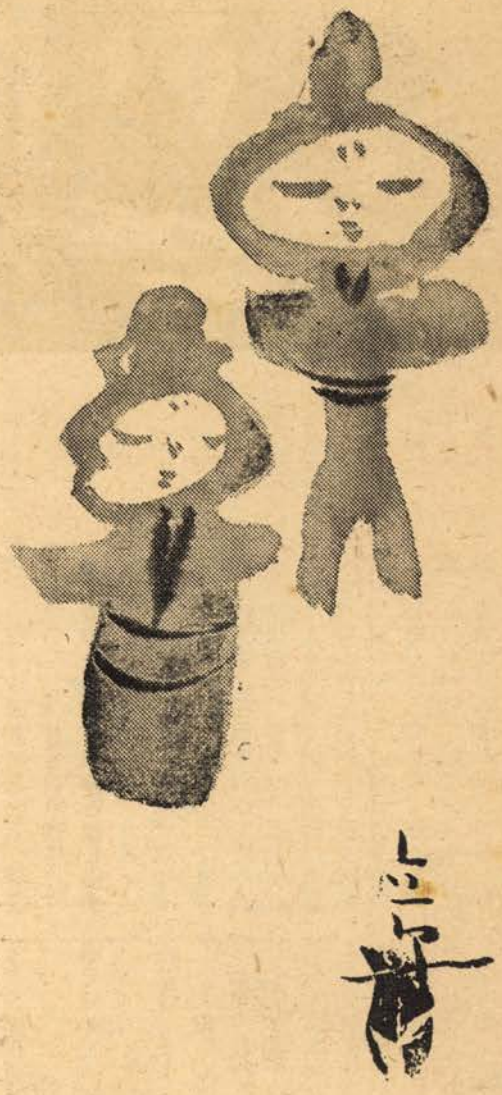
川柳雑誌社句會部

不朽洞句帖

麻生路郎

情報天皇に達せず焼け出され
少し貸せと大学教授如才なし
公報をまだ信じない信じない
もう一度征きたし妻に裏切られ
主婦としての投書を書いて胸にはせ
お互いの貧乏を同情し合う火鉢
政治の貧困さを罵る酒となり

二度目の夫　書齋出て來ず
愛情のしるしの名古屋帯をしめ
住宅の机上設計する若さ
小さな秘密が　女を女らしくさせ
私達と複数で云う愛しよう
失恋が彼を日曜画家にさせ
首しめたまでは覚えている嘆き



寫眞向つて右から方正、生々庵、春巣、梨里の諸氏

川柳から観た医者の内幕

中島、生々庵
尾崎方正
北川春巣

春浅き夕、生々庵居の階上で、三医博（小児科、耳鼻咽喉科、内科）に対談をしていただいた。何れも不朽洞会員（編輯局）

生々庵＝どんな職業でも、樂屋話と云うものがあるが樂屋話と云うものは、その職業以外の人達にとつては尠からず興味もあり、せんさくもしてみたいものだ。誤診とか、医者家業のみじめさの愚痴話とかは医者、殊に私の様な開業医の樂屋話として相当に興味のある問題ではなかろうかと思う。春巣さんや方正さんは天下の名医だから誤診の例なんか少ないでしようが、或は皆無でしようから誤診の句に傑作のあろう筈はないでしようが、自分の句でなくても、誤診の句で良い句だと思われた句はありませんか。

春巣＝「鳥ケ辻」に誤診の句がありましたな。方正さんの選で……。

方正＝そうでしたかな……。めい医はめい医ですけども私に関する限りは米遍の迷医で……。一月号の川柳塔に

治つたで誰も誤診と信じ得ず
（没食子）

と云うのがあります。意味深と云つた様な句ですが、医者は患者の顔色を窺つて重く云う場合と、軽く云う場合とあります。重く云う場合は患者自身が自分の病氣を軽く考えて居るが、その病氣の今後の経過がどう変化してゆくか解らない場合、軽く云う場合は患者が、あまり自分の病氣を重く考え過ぎている場合で提出の句は、前の方の例を云つたものと思ひます。又一方医者にも誤診があります。少し重いと入院してもらつてそれから調べる術もありますが軽い場合はそうもいきません。限られた時間に診察して何か云わなければ患者の方が得心しません。ありふれた病氣でもどう変化するか知れませんので、少なくとも三、四日の経過を見せて頂かなくては本当の事は云えません。珍らしいのになりますと今日の様に医学の進歩している世に一ヶ月以上も診断のつかない場合もあり、又診断もつかず死後解剖して尚死因の摑めない場合もある事を知つて貰いたい。

生々庵＝方正さん、誤診してヒヤツトした事はありませんか。もう三十年も医者をして居られるのだが……

方正＝誤診はさい〳〵あるなあ。

春巣＝私も迷う方の迷医で、誤診も諸生先に負けず沢山しましたが、結局患者にとつては病名はどうでもよい事で治りさえすればよいのですから、そしてその治る力は患者自身が持つて居りますので、比較的大過なく今日までやつて來られた様な恰好です。

方正＝昔は名医になると診断はつけなかつたものです。楠本先生などは診断の欄に腹痛とか頭痛とか書かして、おもむろに経過を待たれたものです。

春巣＝結局医者に対する患者の信頼ですなア。病名は知らして貰わなくても、あの先生に頼つて居れば安心だと思う安心感だけが治るんじやないかと思います。

生々庵＝今の没食子さんの句のお相手になる様な句ですが

信じてはゐるがお見立て腑に落ちず
（捨舟）

と云う句があります。前の句は治つた場合ですがこれは治らない場合の句で、此処まで來るともう患者より医者の方が、不安がつているのであつて医者自身が多少とも落着きを失いかけていることを、巧に患者を役者に仕立て表現し

ている点、句の見付け処に捨舟先生の老巧さがあるわけです。

もう死んだ筈の胃癌とバスで逢ひ　（無名林）

これは目出度い方の誤診ではありますが、当事者としては少なからず、冷汗もので、程度の違いはあつても、どんな医者でも一例や二例はこれに類するものを持ち合しておりましよう。冷汗ものと云えばこんな句があります。

誤診して菓子折貰うこともあり　（一哲）

これも大抵な医者が経験した事で、貰つた医者の複雑な顔の表情が目に浮ぶようだ。ついでにもう一つ

悠々と誤診のまゝに押してゆく　（瑞川）

この句になると河内山宗俊でありますが、この場合、外から見る程先生に図太さはなく内心は薄氷を踏んでいるわけで開業医者の氣の弱さを逆説的に「悠々と押して行つた」聞くも涙の姿であります。

方正＝先程の胃癌の句すが、これは手で腹壁に触れて堅いものがあると、そこでレントゲンを写した処、胃部に陰影を認めた後、腹を開いてみると全く別物であつたことは外科医にしば〳〵聞く処です。私の専門に於きましても喉頭癌、食道癌で、しば〳〵誤診を起す事がありますが、面白いことには癌と思われる部分の一部分を試験的に切除致しまして検微鏡的標本を作つて病理の大家に診てもらつて癌と云われた患者が治つた例もある位で中々むつかしいことです。

春巣＝先刻の菓子折の句ですね、生々庵先生の云われたのは開業医の普通の場合の心境だろうと思いますが職域の病院に勤務して居ると特に頼まれて誤診をする診断書を書いて、（笑声）菓子折を貰うこともあります。

生々庵＝はア――そんな事もあるのですな。

方正＝私は絶対にありません。（笑声）

春巣＝まあ胸の病氣が多いです。先生の方は耳鼻咽喉科だから……そんな事ないでしようが辞職する時や何かにね……。

手遅れときかされ佛浮かばれず　（生々庵）

前の誤診の句と比べて、死んだ人も三途の川を行きつ戻りつして居ることだろうと時時思い出す私の句です。

春巣＝手遅れと云う言葉は医者にとつて、えゝ言葉ですなア、私も此の頃は一寸こじれた患者が來ると初めに「手遅れやなア」と云つておいて、それから親切丁寧に治療を始めることにしています。耳鼻咽喉科ではそんなことありませんでしようか。

方正＝手遅れになつて來てくれた患者さんは非常に有難いので、こうなればどんなヘボ医者でも誤診は致しません。（笑声）春巣さんが今お尋ねでしたが、先刻申しました喉頭癌、食道癌などは手遅れになれば、至極簡單に死の宣告を致すのみです。

生々庵＝今の方正さんのお話しは病院で加療される偉い先生のお話ですが、我々一線に立つておる開業医は誤診とまでは行かずとも、手遅れをどう処置して行くかは日常度々頭を痛める事です。

手遅れを藪醫は藪醫らしく逃げ　（生々庵）

と云う私の句がありますが、誤診とは又別な意味合で頭を痛めるものです。

方正＝

手遅れと云はず注射で儲けてね　（方正）

はどうですか。（笑声）えらい口が悪いな

生々庵＝

信仰のお蔭手遅れとは云はず　（無名林）

と云う句がありますが所謂信仰のお蔭で手遅れになる場合は沢山あるでしようね。

方正＝そこで

迷信へ相槌を打つ流行り醫者　私の句です。

生々庵＝それではまあ医者の樂屋落はこの位にして医者稼業の惨めな生活に対する愚痴句をあげてみてくれませんか。

方正＝私は愚痴る程老いたとも思いません。（笑声）

生々庵＝まだ独身ですなア。（笑声）

春巣＝私もサラリーマン医者をやつていますので、そんな句はない様に思います。そう鳥ケ辻の春雄君の句に

月給を貰ふたんびに腹が立ち

と云う愚痴は感じます。

方正＝生々庵氏の様に大いに流行医者は別としてサラリーで立つ医者は法科出と同じレベルでサラリーを出しているのが現状です。近々職階制に依るそうですが。大学は法科の三年に対して医科は四年、それにインターン一年間送つて國家試驗を受け、尚免許証が下るのに数ケ月を要する間のことは認めてくれません。

生々庵＝今日の様に医者同志集つた話の中にも開業医に対する方正さんの様なお言葉もありますが、開業医の日常生活がどの位惨めなものであるか少なくとも一般の方には想像も出來ないだろうと思います。

避暑一つ知らずに町醫五十年　（彈正）

と云う句がありますし、私の古い句に、

皆と別れ夜汽車で歸る醫者稼業

と云うのがあります。皆が面白そうにやつている宴中ばに寒々と夜汽車で帰つて朝の診察に間に合せる開業医は決してソロバンづくのものではありません。

道頓堀小走りで行く医者稼業　（生々庵）

道頓堀を行くときは芝居見や愉快な氣持で歩く場合よりも大抵はちよか〳〵と小走りで行く開業医の姿です。

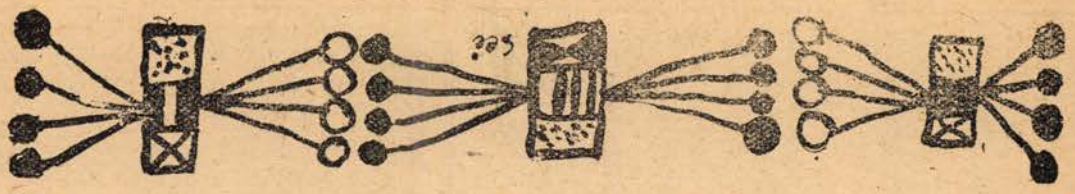
春巣＝内科開業のたけを博士の句に

往診はこんな梯子を上らされ

手遅れは一寸あてとく聽診器

と云う句があります。私の岳父が滋賀縣で開業しておりま

（以下一三頁三段目へ続く）



川柳塔

大阪市　中島生々庵

日に疎くなりそうになし亡母恋し
白髪染め間に合はなんだお元日

丁君の結婚を祝し

荒ら海へ船出遅し晴れ姿

平塚市　木村孤浪

レーンコート捲つて見せる赤い羽根
十万円？ヘエ！丸帶にさわつて見
停年は役得させる側にさせ
キョロ〳〵と商品券で指輪買ひ
おとなりの普請どうでもいぢやないか
三面の六十一はぢゞいじみ
還暦を人に云われてビックリし

池田市　戸田古方

流産の話は猫のことでした
男の子ばかりで元旦から洗い
誰の誰などを娘はきゝたがり

尾崎市　水谷鮎美

石鹸はいらぬ初湯のまるいかほ

祝榮転　満寿氏

温顔に大東京は耀けり

大阪市　市場沒食子

寒行のお布施に母が炬燵を出
年賀電報雑煮の妻をあはてさせ
病んでても株が騰つて儲けて居
默否権刑事がグツト癪にさえ
先妻の子と後添への子と喧嘩

横浜市　福田山雨楼

苦の果てに涙も涸れた十五六

秩父宮様を悼む

生きぬいて貰いたかつた　たたかいに

ホノルル　内藤草二郎

苦労なぞ嫌やとはつきり云われたり
あなたのはこれねと十八番を彈き出され
あの頃は樂しかつたと切れてから
平和とは尻に敷かれることでした
明治でも末よと女若い氣で
妻の眼は俺のマイナス丈けを見る
旅の宿あちら向いてと脱ぎながら
秋だなあーしみ〳〵入歯洗ひつゝ
婦代講座前途多幸を疑わず
ビルの窓仰げば待つてと云ふ手振り

大阪市　須崎豆秋

らりるれろはつきりしない程に酔い
酒飲まぬお正月などさみしかろ

大阪市　正本水客

火鉢の火入れにきたので旅を起き
発車ベルネオンまたゝくまたゝくよ
百円のチップはひよいと挾まれる
強情な子供に負けて笑つとき
脈のある話にしとくのも弱氣

新平家を見て

なし難きを爲して清盛ためらはず

大阪市　丸尾潮花

失恋か君も作家になりなはれ
生きている悲しみ金に手をつかへ
色と逢う隙もあたへず旦那來る
子の歌があられのなかを突走る
餅焼いて年賀ハガキのくじを聞き
娘ふと今年も嫁けぬなと思い

大阪市　北川春巣

カメラ肩に暮のデパートのし歩き
歳暮届けて「德不孤」の額を見る
スキー持つ人を羨む暮の汽車
遅う來た賀狀白浜にてとあり
小遣をくれぬ祖母には用がなし

美秋氏の長男出生を祝う

店を嗣ぐ産声しかと店で聞き

奈良県　尾崎方正

年賀狀整理もつかず隅に積み
冗談へ眼に角立てる未亡人
痩せ腕へオーヴァまでも重たそう
つまみ喰ひする眼付なり銀狐
世は挙げて鍍金文化と銀狐
アペックのどちらも利用してゐる氣
風邪声で戻る夫へ云ひそびれ

大阪市　武部香林

おめでとうの代り卒翁まず叱り
年賀には來んでもよいと社長さん
君が代がすみ元旦もベートーベン
生活につかれ初日をまばゆがり
何喰わぬ顔で女のかせぎ蓄め
借り上手アウンの呼吸心得て
私生活にまでも社長は口を入れ
ラヴレター書けぬ男で女好き
スプリング人形のように舞妓消え
金足らぬぐらいを苦労にしてしまい

大阪市　木下幽玉

電車事故それから家が氣に掛り

又舌をかみそな唄が流行りだし
大寒へ骨がカラコロ鳴りそうな
肺病と云う十字架の重いこと
偶然生き残つた様な私の元日
こんどは親父が貸したのも取れない
　鳥取市　中島鉄洲

暦日の無き身にも好し年賀狀
　大阪市　水谷竹莊

日本髪エーやないのと取卷かれ
百人一首身につまされる歌ばかり
同じ日に休みをとつてうたがわれ
麻雀の計算もする給料日
　勅題船出

仲人もテープをにぎる別府行
　鳥取市　杉谷湖山

郷愁をそゝる大根軒に干す
くつきりと煙突雪の中に立ち
世帶から通れし旅の亦淋し
　下関市　國弘半休門

犬に似て歩けば残金拂わされ
もつたいなくも表彰式のながたらし
　八代市　佐野卜占

持参金づきではないに恐妻家
ボーナスの話関係ない話
　京都市　大鶴喜由

こつぼりの雪を拂えば緋がこぼれ
餅がとろけますと亭主ひつぺがれ
片や恋片や本持つ学徒かな
ストリッパー見にくる人をあわれがり
　大阪市　山口秋花

眼を閉ぢりや喰の母に意見され
　大阪市　土井文蝶

これからと云うに黒枠惜しまれる
正月を寢て暮すとは日の永き
待つてましたと云はん許りの税務署よ
　尼崎市　小林文月

糸賣場妻のお伴で覚えて來
ある時はハンドバックも持つてやり
パン／＼の近くは妻に添うて行き
　札幌市　山根白星

勘定のとこまでおんなまめかし
名ばかりの夫婦ですわと寄りかゝり
スキッチの予期に反したとこが点き
夜酔うて來る姉さんに養はれ
温泉へ夫婦の意見まとまらず
湯の街へ俗化を嘆く文士來る
お世辞さへ聞けず落目の旦那藝
美容院お客も礼を云うて去に
母が嘘云つて一家が無事に済み
　大阪市　富岡淡舟

氣にくわぬ上司を默殺して通る
お役所の手落ち始末書だけで済み
靴下の若さを娘に笑はれる
社用族ならん影絵の高調子
　山口県　長野井蛙

御無心があつて火鉢へ遠く坐し
初恋の人も結局金に嫁し
年賀狀達筆に似ぬ不倖
　大阪市　上田春柳

オールナイト酒は涙か溜息か
　哲水君重態と聞きて
危篤だと聞いて受話器を持ちかえる
　布施市　森下愛論

庭の隅淋しい雨の三輪車

ナンキン錠かけて女房の晝湯なり
　岡山県　丸山弓削平

動いたら冷いわいと鰐の居る
ハイキング山羊に問いたい路になり
猪へ猟師三十人かゝり
枯枝の鳥も実は歩哨なり
モグラモチ月を拜んで引返し
ストーブに猫と犬とが雜魚寢をし
しまいには立たして見たい宮の鳩
　岡山県　直原七面山

名月に誘い出されて犯される
美人祕書來てから万事派手になり
湯の宿で女になつた箸を取り
はれ物のやうに育てた娘の家出
　交響楽団の演奏会に臨みて

曲佳境クシヤミするのを差控え
　宇部市　上林粗影

バラ／＼事件を読んで妻を見た
さんざ嘘女のうなぢの白いこと
裏を返しても知らばくれてゐる日本紙
税吏來た刹那夫婦喧嘩して見る
天皇の笑び初刷の幅となり
かくて正月は去り餅のかび
　大阪市　西森花村

嘘交ぜてこれも社交と信じてゐ
退院と聞いたかあわてゝ見舞に來
白足袋にぼつたり落ちし牡丹雪
拜啓で春夏秋冬間に合せ
八百万税金除けの神もがな
　鳥取市　河村日滿子　日滿子改メ

家屋敷を賣つても治す氣でいるに
新藥の値に病人が断らせ

治るさとあつさり医者でない僕が
十二月二度もお釣錢を間違はれ
嘘吐きの名人になる十二月
戸締りを忘れ元日迎へたり
寢正月かて贅沢なものゝうち

兵庫県　家沢薺花

代議士も大低でない年賀狀
大根はこのへんらしい雪をのけ
酢ごんぼが一鉢残り松が取れ
喜んでくれる鯨でさへ買えず
算盤も缺けては孫の汽車になり
正座から倒れ藝者は向きをかえ

熊本県　西口如川

权利だけ義務は無かつたストの搖れ

岡山県　福島鉄兒

愛猫自動車にはねらる

猫の死がこうも淋しいとは知らず
いつそ辞めたろと思えど好きな娘が
妓から否應なしにキスをされ

岡山市　服部十九平

ポマードの要らぬ頭となりにけり
先妻に劣らぬ美人又貰い
天才を殺してしまつた民主主義
名が賣れて後援会が邪魔になり
妾宅にゐて臆病な犬となり
手加減をせぬ公平が蔑まれ

岡山県　大森娛句樂

考慮して居ると歳暮の御挨拶
餅つきも録音になる相撲部屋
ほのかなる初日旗にも雀にも
謠曲へ公休と云う声集い
初詣娘何やら口の内

お汁粉屋餅がふくれるのを待たせ

尼崎市　長谷川三司

鮎美氏の故母堂を悼む

十本の一つが欠けて春寒し
今年もとまた振出しへ舞いもどり

兵庫県　若林草右

失業の身にも嬉しい注連飾
一票を狙ふ賀狀が不箋付

大阪市　足立春雄

初雪に淋しく思ふ世の濁り
宵戎に参つてからの風邪を引き

熊本県　有働芳仙

元日の軸を誰アれも賞めないな
御銚子の通路末席坐り変え
初夢も見ず熟睡の長壽法
米兵の帰國キツスの韮臭し
樂屋裏バタ〳〵〳〵とつけ変える

大阪市　安岡珊枝郎

かなづかい孫に注意をされて書き
慢性の正月なれどいやでなし

広島県　山田季賛

ストーブで原爆話す事務始

岡山県　水田千石

一念はちぎれた爪がまだはさみ
後足は逃げる準備で蟹進み
強引にはさんで蟹は釣り捕られ
蟹或る日魚スマートやなと思い
流れてる蟹泳いでるつもりで居
ガニマタヤなと思いつゝ蟹這入り
うまくない蟹人間をこわがらず
八方が見えて不安な蟹の旅

大阪市　山本葉光

コンパクト自問自答を訊かされる
東京は嫌い山の娘に老父があり
幸福を見送り忘れてゐた涙

大阪市　東喜久堂

我が生活見下ろしている奴凧
物の怪のように白衣が軒に立ち
反り返り小便をする男の子
アバンだと囁うた妻に飽きが來ず

倉敷市　木村千容

定連は枕並べて討死し
経驗にものをいわせて呼込屋
カロリーがどうのこうのと六十妻

岡山県　田垣方大

青い麦だけが寒さに負けていず
自轉車をしまう儲けた日の元氣
縁談をカルタの日からきらいだし
スタンドが桃色だつた奥の部屋

石川県　那谷光郎

妾宅を根拠に悪の花が咲き
貧乏の印肉までが干乾びる
生きてたか肩書並ぶ賀狀來る

石川県　野村味平

パチンコに理窟があつてやめられず
人权の軽るきを今日も歎きつゝ

大阪市　木村水堂

元旦の訓示徹夜の顔で聞き
同性の勘で処女ではないと知り
なが〳〵と銀行が建つ板囲い

熊本市　花岡英子

ライバルをほめた女のつめたすぎ
母の手をかりて和服の娘にかわり
番台の若い女は本をよみ

高槻市　福田丁路

氣違いの沙汰なる朝のお題目
学問をよそに映画のダンスのと
湯の街が絵になる朝の雪景色
寒さ厭はずスターの樂屋入りを待ち

岡山県　水谷谷水

娘三人一しよに値切るやかましさ
老嬢の欠伸あくまで淋し過ぎ
開拓村トトトトトトとスクーター
本妻は金魚の様に生きるだけ
長い目で見る氣妻君妬きもせず
暴れんと飲んで議事堂やないさかい
ほめるものないから部屋の廣さ褒め
末亡人はいゝなと妻が呟やいた
はやりでも狂言自殺とは淋し
あんなのでスーツと出勤してみたい
來い來いと云うのが好きな課長さん

岡山県　佐々木告天子

旧友の湯槽でつきぬ將棋談
猪突する香車の懲れなる最期
龍馬雲を得て盤上の狭く
世にうとく桂馬が隅で忘れられ

岡山県　椙原一善

理想ちと下げて三度目の見合
不承知の様でキッスへ抗らはず

岡山県　岡田夜潮

騒がねば帰してくれぬ捕虜となり
顔色を恐れて意見藏つとき
仁王門チューインガムが命中し
白痴娘をつれて戻つて梳いてやり
苦労した時に出來た子肩をもみ

岡山県　坂井三葉

停電へ又灰皿を踏まされる
失業のタンス空巣をあきれさせ
金になる話座敷へ通される
氣短かになつたも年のせいにされ

岡山県　政田大介

墜ちて尚罪な男を忘れかね
叱られた事も書いてる主婦日記
叱られてからの男を忘れかね

岡山県　臼井三林坊

上役に怪しい処世術を受け
此の辺も市に合併と云う藁屋

大阪府　青柳扇子仙

今日は今日で落胆もせずコップ酒
ドヤ街のここら都会のドン詰り
酒おんな情無用の池袋
輪タクの返事未亡人ありますよ

岡山県　岡村牛耕

一斉に見られ座敷へ消えたがり
老妻と話題をさがすお元日
たまさかに夫婦でゆくが葬儀なり

茨木市　下山清潮

何時迄も遺産で喰へる未亡人
山彦へチストの自信つけて來る
年玉を妻銀行にされて暮れ
迷子も婦警に抱かれ泣きじやくり

岡山県　本田恵二朗

細雪俺の白髪を眞似て降る
強情がからくも生きる盾となり

大阪市　眞鍋一瓢

とむらいに行くにしてさへあのルージュ
果物屋百匁賣つても並べかへ
男默つて連れられて行くイヤリング

師走々々道頓堀の灯は自若
皮膚病の如き地表の戰いよ
極道で通すまでさえ一苦労
人权尊重すれば肩引き動かない

大阪市　永田六龍子

てんやわんやの騒ぎ見い〳〵ゴミ漁る
新尼のそのかみ語る顔のつや

豊中市　村上ゆずる

洋装が似合い正月物足らず
人間の堅さ雨傘手離さず

鳥取市　森本法泉子

また一人癌の話に割り込んで
好機逸せず香典もつて行き
親馬鹿のさわあれ父と子のえにし

祝暢月氏古稀

杖ひいて來て句の席をよろこばせ

岡山県　井野格一

言訳のうまさへ声が荒くなり
氣のきかぬ友をアベック持て余し
焼もちもやかぬ女房でお茶が冷え

岡山県　臼井呑風

精魂の麦踏みあつけない姿
盗癖の人で祝詞のうまいこと

鳥取県　日置文笑

床の間を背負つて見たが酒は出ず
有名になつて本職そつちのけ
スタンドはさも勉強をする如く
本車々々少し休んで見たらどう
篤農と云われ娯樂に縁がなし
誘惑へお花の稽古棒に振り
親は農子は大学で哲学科
新しい事業へ山が一つ減り

哀妻物語

——別名おのろけ太平記——

東野大八

この新春の某日、末の子と添寝している女房が

「ねえ、とうちやん」

といやにしんみりした調子で私に呼びかけた。休日はオール寝ることにきめている私は、そのときことたつに足をあずけて、ぬくぬくとまどろむとものうしん閑とした松の内の一ときをたのしんでいた。私の返事をまつまでもなく、女房殿はあとをつゞけていた。

「早いもんねえ、貴方と一しよになつてもう十年。この二月二十四日が第十回目の結婚紀念日よ、」

感無量の態で、女房殿はこういつて深い吐息を一つした。思いは同じ私とても、へえ！十年……とおうむ返しにそう答えたまゝ、まじまじと空間の一ところに眼をすえたまゝだつた。風雪十年まさに一瞬、あれもこれもである。私は無聊をかこつてのしゞまのなかで、たちまちその十年の歳月に身を委ねていつた。

昭和十九年二月二十二日の夜、場所は中国北京のとある民家の一室。三つの人影が燈火管制の暗いたれ幕の下に座つていた。

……とこういうと何かこう大事件の発端みたいだが、私という人間の歴史にとつてはまさに大事件なのである。私と彼女、そして彼女の父。沈痛の気座に満ちて、たゞ炭火のみが赤々と冴えている。

「……というわけで東野君は明後日戦地に向つて出発する。こんな戦争だ、彼の生死はもとよりはかり知れない。それでもお前は嫁くか」

「はい」

とこの父の言葉へ、低いがはつきりと答えて彼女。しづかに顔をあげて、父と私の顔をゆつくりと眺めた。そして

「嫁きます、私」

ときつぱりいゝ切つた。その言葉に瞬間、はつとなつて見返る私の眼に、涙が玉と光つて彼女の瞳にとびちるのが見えた。あゝ、という名状しがたい吐息が、私の胸底をついて出た。なんということだ、故もないその言葉の詠嘆は無量だつた。こうして彼女は、私の妻となつた。彼女の名は八重子。

なぜこんなことになつたか、今もつて私は判らない。なぜかならば私は彼女と一しよに映画とかおしるこをともにしたことはもとより、手をにぎつて口説いた覚えなどはたゞの一度もない。彼女は単なる私の話相手にすぎず、彼女もまた私をそうした相手と私は片づけていた。いわんや彼女は、つねづね私を「おじさん」と呼んでいる。後日彼女にこのことについてきいてみたら

「いやなおとうちやん」

とニヤニヤ笑つて何も答えなかつたが、そのかわり

「あのとき三つも縁談があつたの。それをみんなけつとばしてあんたんとこへきたんだから、ちつたあわつちを大事にしなきあ、ダメでござんすヨ」

とセリフもどきにそういつた。

急場のこととて、式は話のついた翌日ということになつたが、神社の都合で明後日、つまり出発の日の朝ときまつた。随つて披露宴と式があべこべになつた。

戦争なんてイヤだねえ、世の諸式まで変えやがる、初夜がさきで三々九度が後になるなんて、理クツからいえば野合じやねえか。と私は披露宴にきた友人にそういつてこぼしたもんである。

二月二十四日、式は北京神社で質素ながら厳粛にあげられた。急なことなので双方の肉親、親戚は一人も間に合わず、私の場合、親代りは石原青竜氏だつた。サカズキを終つて式場に参列した人々の見送りをうけ、私は太原行の汽車に乗つた。ムコと呼ばれてわづか二時間余、吉良の仁吉の比ではない。

「北京駅の長いホームを貴方はたゞの一度もふりかえらず征つてしまつた。悲しくて悲しくてその日一日私は泣きました。」

と彼女からそんな第一便が後日届いた。わき目もふらず汽車に乗込んだ私は、しかし車中で親父あて、つぎのような手紙を一心に書いたものである。

「……左様な次第で、若い後家さんを作つて死ぬに偲び難く、昨夜の初夜は彼女に指一本ふれずにすごしました。随つて彼女はまだ純潔です。私に万一のことがあればサカズキだけのこと、いゝところへ嫁づけて下さい」

そんな便りを書いて、私は索漠たるなかにも一抹の哀感をどうすることも出来ず、たゞぼかんと雨の車窓に倚つたまゝだつた。そのときの句はこれ。

——あきらめを映す夜汽車の窓は雨

さて私の入隊を待つていたように、直ちに河南作戦がはじまつた。私の配属は兵団本部行李隊。つまり本部輸送隊、馬部隊である。佐官待遇の陸軍報道班員もかくて一兵卒の馬方人足になり下つた。貰つた馬は白いシナ馬で、隊名を「菊若」といつた。顔は長いが純白で、黒いつぶらな眸で私を眺めるとき、えもいわれぬ艶しい表情をする。私はなんとなく嬉しくなつて、菊若なぞというふんどしかつぎみたいな名前はけつとばして「八重」とつけた。彼女の名である。

大行山脈を越え、黄河を渡り、洛陽までの五百里を私はこの白い馬の手綱をとつて歩いた。ド新兵の私がなぜ、このように美しい白馬を貰つたか、このナゾは戦いが激裂をきわめていくことによつて解けた。つまり敵機の機銃掃射はきまつて私の白い馬に集中した。果して幾度だつたろう。あるときは私の脇腹すれすれに凄じい機銃弾が砂煙りをあげてかすめ過ぎた、あゝ、と恐怖に嘆息しながらも、しかし私は元気に彼女の手綱をとり〃さあ、八重ちやん、行こうぜ〃と歩き出したもんである。「白い奴は敵機の目標になる、片づけて

他の馬に変えろ」と分隊長はいつたが、夜間行軍の目標に役に立つ、と私は譲らなかつた。戦場の人間的愛惜は死生を越えるものだ。私はそう信じ実行するところに、新妻への責任を感じた。かくて八十余日の河南作戦は終つた。黄河の覇王城で、馬の八重ちやんとの別れがとうとう来た。軍歌じやないが、とつた手綱に血が通つた二人は、塩原多助以上の馬の別れを地で行つた。前脚をしきりに掻きいなゝきやまぬ八重は遠ざかり行く私を追つてアカシヤの立木に手綱をまいて、ついに動けなくなつてしまつた。その挙句の怨めしい大きな眼を私は今も忘れない。

作戦が終ると私たちの部隊は新郷というところで二分され、一隊は沖縄に向つた。残つた一隊は蒙疆地区に入つた。私の配属は後者で、綏遠に駐留することになつた。北京の新妻から、この間慰問袋と手紙が息をもつかせず殺到してきた。ねたみ、羨望そんないやがらせをよくうけたものだが、それでも私はうれしくそんなことをする戦友が気の毒でもあり、哀れともみえた。次期作戦に備える猛訓練もこうしたことで慰められていた或日、ひよつくり部隊へ妻が面会に現れた。現地召集兵の多い私たちの部隊だけに、私がどこにいるか、この連絡はいつもついていた。

召集兵の準尉殿は外出禁止の折柄とて、公用証をもつて外泊を許してくれたが、班長のK軍曹は現役兵だけに、不時の出動待機を理由に点呼までの外出とすることに訂正した。

何月ぶりだろう、城内の一旅館で私は新妻と対座した。嬉しくはつかしく、彼女は二日がゝりの車中の疲れも見せず上機嫌であれこれと矢つぎ早に話をした。夕食をともに食べてまた話。そのうちに約束の点呼時限がやつてきた。またいつあえるか、これつきりかもしれない、私の胸中は切なかつたが、妻も同じ思いかいつか元気をなくしてしゆんとなつている。靴をはき帯剣をつけ、私は至極事務的に

「では、これで……」

と敬礼した。彼女の眼からみるみる涙がもり上つてきてあふれ、ものが云えないようであつた。私はマスクのまゝ、彼女の唇に軽くキッスしてやつた。

—**戦いのしゞまのなかの寒い髪**

句かどうか、とにかくそんな一句がひよいと出たその帰り途、私は何かしらむつとして（戦争とは何だ）ということだけを百万べんもくり返した。

私と妻の、あえない逢瀬をしおに、部隊はまもなく行動を起した。行手は米軍在支飛行場基地老河口。戦車、重砲、航空隊がわれわれの兵団に協力、これまでにない重装備だつたが、兵団はしかし物量の敵に敢えなく屈し、古風な敵の逆八戦法にひつかゝり包囲潰滅した。私の中隊に残るものわづか二人。その一人は私だつたが、そのとき既に傷つき火を噴く敵トーチカの側面で私は、出血多量のため意識を失つていつた。

—**流弾が白くむしつた木が揺れる**

—**鉄帽へカチーンやられたなと思い**

左腕をやられ、横になつていたときそんな句が出た。しかし真昼というのに、あたりは黄昏のように暗く冷い。私を呼ぶ母や、結婚式場の新妻の白い横顔、それから黄河の岸で別れた白馬が、たてがみをふりたて闇の底をよぎるのが浮んだりした。昭和二十年四月一日のことである。迫撃砲弾のため左腕の上部を貫通され、動脈と骨をぐじやぐじやに粉砕された私が、やがて後送につぐ後送の末、北京の兵站病院にたどりついたとき、私の身体には右手一本、五本の指しか残されていなかつた、何故私は救われたか、救援の他兵団に私の生国の知人が衛生兵で勤務していて、たまたま戦場整理のさい私をみつけ、収容したのだという彼が救つたのか、神が救つたのか、それとも私の無事を祈りつゞける妻の一念が何かに通じてか。私は病院の寒いベットにそれを考えつゞけたが、結論は月並な運命論におちついた。すると私の行手にある新らしい運命というものに、底知れない不安が頭をもたげてきた。こんな身体で果して妻を幸福にできるか、とつおいつ結局私が、いま北京にいることを妻にいうまい、と心に固く決心した。

—**淋しさは手のない袖に風が吹く**

そのときの心境はこの一句に尽きた。

そんな某日、私の個室に一人の兵隊が現れた。大腿部切断の下士官、年輩の人だけに一眼で招集兵と知れる。足と手のちがいだが、同病まさに相憐日ならずして階級を越え、この人とすつかり仲がよくなつた。世間話も尽きたある時、私は思い切つて妻とのいちぶ始終を打あけた。そして一生もうその妻に逢うまい、と決心している旨をいゝ添えた。その時だつた。一心に話をしているため気付かなかつたが、部屋に一人の小さい看護婦が来ていた、床でも掃きながら私の話をきいていたらしい、彼女はやがて私の顔を眺め、ベットにぶら下つた私の名札をみた。彼女は北京女学校の生徒で、報国看護婦としてこの病院に徴用されていたのである。いわば北京のひめ

同舟近詠

四国地区観光バスガイドコンクール
審査員として
松山市　前田伍健

審査員我娘へ似たへハツトする
年頃の素顔もいゝなバスガイド
バスガイド四國は廣い島でありお仕着せえ苦情も言へずバスガイド
土佐は土佐の伊予は伊予節バスガイド
原稿の過ち通りバスガイド
バスガイド八の字眉が和ませる

長野県　高峰柳兒

減税えすかさず保険屋座り込み
クラス会儲け頭がまた変り
末席で家族手当の取り頭

私の柳友

(3)

死んだ柳友

長谷川三司

酒井斗風は三十代の若さで死んだ。おしい川柳家である。会社では私の助手として永らく助けてくれたが、川柳は先輩で私を川柳に引き入れたのは当時の梅田支部の鮎美君と彼であつた。人間的には私とは正反対の性格だが私は彼の句がすきで、よく飲み、よく語つた。川柳では教えられる所が多かつた。未だに居てくれたならと思う。さゝいな事で会社を辞めてからの彼の環境と生活の急変がついに病の身となり、死ぬまで川柳して居た様だが川柳塔へ最後の句、「坐禅でも組もか背広擦り切れた」「何にもかもに負けてなかなか死に切れず」の二句を残し、句も出来なくなつて死んだ。生きて居れば川柳塔の一異才としてかゞやかしい将来もあつたであろうに、おしい事をしたと未だに私は柳友斗風を思う。

万年筆の感傷

須崎豆秋

戦時中妄夢さんが世話をしていた川雑花園支部同人は二十才前後の若い人ばかりだつたので、つぎ〳〵と戦線へ出てしまつてとう〳〵私と妄夢さんと二人きりになつたことがある。その中でも井上登志緒君は輸送船途上朝鮮海峡でブクブクとやられてしまつたんだが、こうして若くして散つた柳友達のことを思うと実になんともかんとも言えぬ感傷だ。私の胸のポケットには今でも登志緒君から袂別記念に貰つた万年筆をさしている。しかもその万年筆でこの文章を書いているんだが。

ゆり部隊の一員。私の運命はこのチビの看護婦さんによつて、再び大きく一転した。彼女の家は妻と同町内の、それも数軒おいた隣組だつたのである。週一度帰宅する彼女だ。

「あんた、御面会よ」

或日の看護婦の伝達である。いわれて私は、中隊の戦友でも来たのだろうと、何気なく廊下に出てみると、思わずギョッとなつた。彼女だ、妻だ。

茶色のツーピースに、白い靴、セットした髪の下に白百合の大きく抱えた花束がゆれている。

絃遠以来の対面は、こうして悲惨な私を彼女の前に押し出したのである。片腕切り落して極度に衰弱した身体に加え、栄養失調で顔は骸骨のように痩せ、皮膚は黄色くしぼんでいる。この男を前に、妻としての彼女の気持はどうであつたか、まじまじと、夫と呼ぶその人間の顔をみて、彼女はしばし呆然自失言葉もなかつたのである。しかし、勇気をふるい起したものか、気をとり直し、私の前にすし、羊かん、果物などをどつさりと並べ〃食いねえ、たべねえ〃と虎造ばりのセリフをいつて、うきうきしてみせる彼女だつた。留守中のあの話この話、彼女は夢中だつたが、じつとその様子をみている私は、病衣の私の身体にまだ気づいていない相手の様子に、さて丹下左膳になつたこの不具の肉体を、どう知らしむべきか、思いわずらつた。そのときだつた。

「ねえ、ふところ手ばかりして話をきかないで、ちやんと手を出して遠慮なくたべなさいよ」

と妻がいつた。永久に一つの片袖からは手の出ないことも知らずに……これを機会にその由を打あけた時の彼女の顔は、思い出しても言語に絶する。

こうして妻は、一日おきに病院に現れた。それは終戦となり北京城内が物情騒然となつてもなおつゞけられた。食事情の悪い折だつたが、彼女の抱えてくる多くの土産ものは、おはぎ、すし、カステラとぜいをつくしていて、そこに払われる犠牲がいかようなものか私は人しれず頭が下つた。

終戦の年の秋、現地召集の私は妻の請いもあり、現地除隊した。彼女の父と妻と私の三人の生活が北京市内の一胡同の院子の一つにはじめられた。院内には三家族いて、家主は李某という朝鮮人一家、もう一家族はKという京染屋の一家だつた。除隊して数日後、父は友人の家に二日泊つた。この二日間は結婚して初めての、二人つきりの時間だつた。私たちはこのとき初めて本当の夫婦になつた。

夫婦になつても妻はいぜん、私をおじさんとよび、京染屋の細君に冷かされたものだつた。やがて京染屋は郊外に集結。残つたその跡へ、血気の朝鮮人十数名が乗りこんできて、日夜激論、乱斗、酒宴が続いた。なんでも彼等は重慶から来た若者たちで、朝鮮独立の志士だとかいう、なかには新聞記者が三人もいた。これは家主の李さんが、朝鮮独立青年行動隊の隊長だつたからである。

この間、私は北京にいる昔の友人たちから誘われて、島映という人物の率いる団体に加入した。彼は東天紅という秘密結社を組織し、戦時中馬占山を救け、現在は国軍の大佐になつている。彼は私を、在留邦人に呼びかける〃民声〃という新聞の編集主任に任じ、民主自治党の結成を呼びかけた。

（この間の話はなかなか面白いが割愛する）この加盟を怒つたのが、義父である。日本人でありながら敵方につき祖国に弓を引いた男の部下になるなら、娘と義絶だ。妻も〃そんな身体で……〃と泣いた。彼等の軍隊が熱河に向うからともに行動するように……といわれたときである。私は妻の涙についに断念せざるを得なかつた。かくして西郊に集結、島大佐のところへこの旨を伝えて別れたが、このとき彼は正金銀行の東京で受取れる二十五万円の小切手二枚五十万円をせん別にくれた。

西郊に集結後、今後はまた別の友人から、中共軍に入れと勧誘があつた。親友の画家OもKもTも行くという。こゝでまたぞろ一もん着。大陸にとにかく私は残りたかつたのだ。ついに義父は私という男を見限り〃故郷へ帰つたら東野と別れろ〃と妻に宣言するに至つた。この事実は故国につき佐世保で現実化した。私も妻に私の郷里の四国は岐阜と一切がちがう、私の親と君は一面識もない、引揚の疲れた身と心で四国に行くのはお前のためによくない〃と因果をふくめて別れることにした。妻は片腕の私の身を気づかい、皇軍慰問に出て、終戦となり抑留の目にあつた同じ船中の旅役者が四国へ行くというので、その座長に一切を依頼した。私たちはまたも日本で生別の危機にさらされたのであ

る。こうして十六年ぶりで私は故郷の父と対面した。だが日ならずして私は、故郷の無為な生活にいゝ知れない無聊を感じはじめた。しかし働こうにも片腕の不具者に何が出来よう、まして大陸生活の私の性格には、みゝつちい故郷の人々とは何一つ相容れなかつた。ころ四月。

—引揚げの眼に花だけが美くしい

そんな句が作れたのもその時

—ひがむまいそう思うのがひがみだろ

—大陸に殘る片手も淋しかろ

そんな句の生活がつゞいた。

こんな最中、妻が無断で生家を飛出し四国へやつてきたのである。

「私はあんたの奥さん、どうしても別れては暮せませんし、人間として許せません」

というのである。かくて妻と貧苦の八ヵ月が始る。住居を変えること九度、寺の位牌堂に住み、見知らぬ町の納屋でも暮した。その間に妻は姙娠した。奈良の深井凡々さん夫婦から、温い情の出産必需品を送つて頂いたとき、私たち二人は泣いた。今も妻はその一部を大切に保存している。孫が出来ると知つてか、岐阜の義父も折れて四国まで妻を迎えにきてくれた。和解の一幕も書けば舞台でやれそうな筋だが省略。

こうして妻は岐阜の生家で私の子供を生んだ。

—父ちやんになつた夜星はみな光り

—父という名がはづかしい腕一つ

子供が出来ると、私も職がきまつた。地方紙の記者である。勤務三年、若い社長の気に入られて編集局長の内定と同時に、義父は死んだ。そして妻の郷里岐阜の新聞社に北京時代のつてを頼つて就職、試用入社から万事出直しとなつた。こゝでまた三年、今年のこの春は、三人の子の父となつている自分に気づいた。風雪の十年はこゝで一応の引幕を下ろすわけだが、果してこれからは雨か嵐か。時折私は、独立の旗ひるがえした李さんや、モンゴルの朔風に去つたKや○熱河進軍の東天紅島部隊、乱世の国でこの人たちは今どうしているかに思い至り、覚えず血を湧かす。だがその時愛すべき妻は、

「そんな身体で貴方はダメ、第一あたい達が離さない、それに再軍備になつて日本人の男がみんな軍服を着るようになつても、あんただけは大丈夫」

そういつて彼女は勝誇つたような顔をする。その彼女に私はなんともいえない微苦笑をもらす。この微苦笑のなかにいる私は、案外一番しやわせな私かもしれない。

（昭二八・一・二）

（五頁より続く）

して私も疎開中、開業医生活をしばらく見ておりましたので先程生々庵先生の云われたお氣持はよくわかります。

生々庵＝月給貰う度に腹が立つようじやいかんがなゝ（笑声）

方正＝えらい開業医の泣き事ばかり聞かされますが、我々月給取りの医者は何分サラリーが安いのでなア

生々庵＝それで嫁さんも貰えんか。（笑声）

方正＝その辛さは私等もよく解つて居りますので、往診をしなくてもよい病院を撰んで赴任致しました。

生々庵＝方正さん長いこと耳鼻科をやつていますが、辞めて他の科に轉向せよと云われたら何科をやりますか。

方正＝まあやれそうな科はありませんなア

生々庵＝怖いやろ

方正＝往診は嫌やし、患者から卷き上げるのは嫌やし……結局山へでも籠つて、嫁がないから美人と暮す想像でもして暮します。（笑声）

生々庵＝春巣さんは小児科にはいゝと思うがな。

方正＝私もそう思う。氣質は優しいし……。

春巣＝私、自分で考えて駄目だと思います。女の人と話すのは適わん方で、小児科をやると殆ど女の人と話をすることになりますので、その意味で婦人科も駄目ですな。

生々庵＝私は中学時代から子供がやたらに好きな爲に小児科になつたのですが　川柳をやる様になつてから、しみじみ小児科をやつておつてよかつたなアと何時も思います。路郎先生の「俺に似よ」の句を診察室に掲げて日々の日暮しをしている事が、他の科よりも一層有難たく思つて居ります。方正さんに他の科へ変る氣持がないかお尋ねした私自身が小児科以外では絶対に暮せぬ様な氣がします。

方正＝私は川柳をして得をしたと思うのは患者に色んな角度からものを聞ける様になつた事と思う損をしたと思うのは勿論生れつきの口惡もありますが、変な事を云う患者には肺腑を貫く様な皮肉を持つて答えます。然しそれでも何とも反應のない人が世の中に多い様です。これには医者も匙を投げざるを得ませんな。（笑声）

春巣＝私が川柳をやつてよかつたと思うのは腹が立たなくなつたことです。

生々庵＝春巣さん、昔は腹を立てましたか？

方正＝春巣さんは学生時代から腹立てん人やつたと思います。

春巣＝擲り合いの喧嘩と云う事はなかつたが腹はよう立てました。学生時代から川柳してましたから、方正さんの知つて居られるのは大分腹立てんようになつてからでしよう。（笑声）

生々庵＝大分遅くなりましたな。それぢやこれ位で……

（梨里筆記）

近作柳樽

路郎選

錢貯めて分家些か頭が高し　広島県　山田　桂角
新嫁の割烹着白く暮れかかり　同　同
尺八にすがる生活の不倖せ　同　同
病床へあれあれあれと嵩む借　同　同
どん底を妻よ図太く生き抜かう　同　同
灘の味あゝ灘の味癒り度し　同　同
動物園檻に履歴書貼つてあり　同　同
何日見てもガム嚙むように牛のあご　同　同
上出來の仇名をつけてつねられた　大阪市　三木　泡起
妻の買ふ我がネクタイは赤かりき　同　同
美人観変りそろ〳〵中年か　同　同
双子でもパチンコだけは上手下手　同　同
一本の夫の白髪すて置かず　同　同
スクータで商賣仇に追ひぬかれ　同　同
へべれけに二円で酔えた回顧録　今治市　長野　文庫
郷土史の端に先祖が居る自慢　同　同
法学全集紙の相場となつて果て　同　同
生命の実相すがり甲斐もなく　同　同
勉強が過ぎても親の氣に入らず　同　同
愛人と書かす情婦と刑事書き　同　石川ひさみ
女給さんかと母親取りあわす　大阪市　同
散髪は嫌ひでないが金が無く　同　同
青春をまた金で死に恋で死に　同　同
わて内氣ですと書きたいこゝは書き　同　同
私鉄スト迷惑かけた顔でなし　大和高田市　同　岩垣日本村
「話中」さても捨鉢なる声よ　同　同
雪になる寒さを道で語り合ひ　同　同
三輪車後を向けば父と母　同　同
初雪に三本引いた三輪車　同　同
税務署の鞄も春は抱えられ　岡山県　富岡　青柳
初刷りの海勅題は船出なる　同　同
僞造かと見直すパチンコの煙草　同　同
水にもならず万年筆は出る　同　同
楽しんで見る雪遂に雨となり　同　同
プラスにはならぬ火鉢の長話し　同　同
先妻の名をふと呼んだあわて様　和歌山　浅川　桑南
あんな人誰が煽てた立候補　同　同
鶯の糞をほしがる附添婦　同　同
妻と背くつつけて聞く風の音　同　同
馬糞悠々式場とも知らず　大阪市　吾郷　玲人
冗談を笑はぬ人が怖くなり　同　同
遠道を聞いた女は連れを待ち　同　同
小鳥部へ一番先に春がくる　同　同
めしやの子客と列んで朝を喰べ　同　同
漫才へ警官少し笑ひ過ぎ　同　同
おみくじを数だけ買うた律儀者　大阪市　山崎帆加夫
啄木へ吾れの十九が淋しかり　同　同
濫民も他人に唯の山と川　同　同
嶺の雲語るに不足ない白さ　同　同
啄木を想う小樽の霧深し　同　黒本　芳泉
妹を貰やよかつた倦怠期　広島県　同
生き抜かん悲願片肺駄目なれど　同　同
悲しさは酒に呑まれた父の顔　同　同

雑筆春秋

雪の或る日に

河村日滿

松もまだ明けきらぬ鳥取に、十幾年振りかの大雪が、大火あとの復興もまだ序の口のバラック街に訪ずれて、家諸共押し潰されはすまいかと、それは〳〵心配な今日此頃。

県民の足たるバスは、目下のところ何の役にも立たず、テクシーでフー〳〵言い乍ら、両股の付け根が痛くなる雪の道を出勤している。

女は古えより内股でのみ歩くものと、覚え込まされたのか、勝手に覚え込んだのかは、僕自身もはつきりはしないが、兎に角、女は内股だと考えていたのに、今度の大雪は、僕のそんな封建的頭脳を、根底から覆えす大発見をさしてくれた。

即ち、もとに戻つて雪の道を出勤のある日、僕の前を一人の女性が、これもテクテクと歩いて行く。一筋の雪の道は、人一人をも追ひ越させず、のろい女性のあとからでは、牛方のあきらめで、如何ともしがたく、必然見るものは前の女、しかも腰部より下の方へ眼の行くのは仕方がない。暫〳〵

金よこせの声に今年も暮れんとす　同
睦じう暮せと父が酌いでくれ　同
イミテーション女体の熱れ切って　貝塚市　宮本　甲馬
收賄の身へ透きとおる晝の風呂　同
オワイ舟が行くよ岸辺は語らうも　同
霧の夜のオーバの女どこへ行く　同
みとり妻せめては変えよ髪の型　同
斗病三年看護婦さんも子を抱いて　貝塚市　堀井　一峰
斗病三年知つて居ますと月が言ふ　同
斗病三年やつとしびんがとれました　同
斗病三年もう新藥へあわてない　同
斗病三年医者にたずねることもなし　同
すき焼の位置替へさせるボタン雪　岸和田市　高橋　操子
ポチ袋初荷の汗へ配られる　同
終点で恋を失ふバスガール　同
二杯目は遠慮せずのむコツプ酒　同
正月やないのと女に甘えられ　貝塚市　小島さざすず
ファインダー天使少女の顔になり　同
奥様と坐して野人と言うとれず　同
安静の床から苗の指図して　同
つい生地が出て日本髪ガムを噛み　倉敷市　野田素身郎
正月の日直日本髪でする　同
喧嘩した朝泥靴のまゝで出る　同
先づ寒かつたことを出張復命し　同
角細工鹿はこれ程おらぬ筈　愛媛県　米沢　曉明
シャツターはどれも陽明門へむけ　同
とにかくも今年も除夜の鐘が聞け　同
これ以上言えば怒らすだけの事　同
素張らしい渾名で次官止りなり　愛媛県　渡辺　曉童

今にして参謀本部の地図に依り　同
父ちやんのサドルカバーも世帶色　同
何考へてますと彼女きいて來ず　同
肉臭のない女性美通る冬の街　石川県　杉浦　醉羊
棺側の看護婦の恋短かすぎ　同
温泉にひたりどつちも國の事にふれ　同
温かいこゝろがかよう掘ごたつ　兵庫県　吉原　紅月
方言が飛出す程に酔いちまい　同
珍客え玉露の鑵が見当らず　同
待たされた挙句電話へ中座され　岡山市　宗高八ツ茶
なすり合ひして礼狀を出し忘れ　同
逢いに來る実の娘のあるマダム　同
残照の倉に淋しい松飾り　大阪市　平野清流坊
失業者母にすまない年が明け　同
生前の夫は美談で飾られる　同
いみじくも見染めた柔道初段の娘　愛知県　岩川　寛虚
骨壺を前に笑つてゐる写眞　同
醜さわ女一人の食べる影　同　竹内雨季舟
戰後派へ明治大正の強わ意見　貝塚市　同
重役の一歩へ社長の娘をもらい　同
試写カメラ犬の食事もとつてやり　同
毛糸編む妻の使ひもする弱さ　山口県　加川　大然
山へ來て秋を吸ふてる飲んでゐる　同
弁当が重とうなつた紅葉狩　同
肩抱いてほしいひとあり廊下の灯　兵庫県　森本　花子
女史の詠む松にしたがうぞとは居ず　同
恋なんて意味ないものにして嫁ぎ　同　中江破天荒
青春は彈雨に曝し既に老ひ　大阪市
神様も宣傳効果氣にしてる　同

らくは何の気もなく、その女に付いていた僕は、その女性が素晴らしい外股であることを発見した。ザクリ、ザクリ、と一歩一歩残してゆく足跡は、気持のいゝ程の外股である。

内股が女の代名詞ぐらいに思つていた僕にとつて、この偉大なる外股の女に、異常なる興味を覚えたのを許されたい。いくつぐらいの、如何んな顔をした、等々が、遂に僕をして物好きにも、スネまでもある雪の中を、走るようにして女の前へ出させた。

二十才を一寸出た程度かナ？と思い乍らも別の頭は有難度いことに「外股で歩るく女の顔を見る」なんて駄句つているのだから面白い。

道が二股になつたと同時に、それ〴〵の出勤者が続々と交叉しだす、女性が相当に多いのを幸いに、足もとばかり気を付けた僕の調査に、なんと全部が全部外股であつたのである。

少々は新しい心算の僕も、残念乍ら皆さんの前に、如何に古い頭の持主であるかの恥をさらけ出すと共に、僕と同様な考えを持つている人の多いのではないだろうかと其の後連続の大雪に、相も変らず女性の外股か内股かに、心死の瞳を向けている僕を哀れんでもらいたい。

雨靴のもう内股でなかりけり

但し之等の女性は全部雨靴であつたことを付け加えておく。

にきひとり美顔水
綿谷雨天堂

國破れおまけに故郷はダムの底　同
うつかりと手鼻かんだるモーニング　岡山県　藤井　呆声
汲む酒も互に肚の探り合ひ　同　同
ムツとすり軒で鶏鶏がオコルナヨ　同　同
社宅にも釘を打つ音年の暮　和歌山県　秋月　宏方
七福神入歯もほしい御年配　同　同
暴風にまだ出逢はない宝舟　同　同
年の暮村長さんも預金出し　岡山県　大塚美能留
けなげなる行商一軒家までも來る　同　同
笑うだけのわが子の顔を飽かず見る　同　同
身勝手ないつか冷たい人であり　和歌山県　久保田青竹
お喋べりと世話好きだけが母の趣味　同　同
女秘書表情もなく留守と言い　同　同
侘しさはタダの映画へ妻をやり　愛媛県　藤田　博人
頼られる男になれとはきびし　同　同
似た様な暮しと思や鯛を買い　同　同
ミスポリス髪が結いたいお正月　出雲市　佐藤まさる
巣鴨から出てパチンコへ眼を見はり　同　同
お土産を待つておいでとクイズに出　同　同
闇僚はつぎ木のように扱はれ　赤穂市　川西　去水
能書に安心したら又ふくれ　同　同
感謝の諸土間にころげたまゝくさり　同　同
師走の灯また印肉を掘り越し　岡山県　岡田　青果
一本の煙突に街養はれ　同　同
この穴は三助だけが覗く穴　同　同
眼で叱る仕草へ子供ためらわず　出雲市　久家代仕男
土百姓ですもいささか得意そう　同　同
担俵会のつそり出てわ担ぎ挙げ　同　同
とりあえず馬を射んとの贈り物　米子市　勝田　正郎
借金王といわれる才があつて欲し　同　同
焼酎にどれも話せる顔ばかり　岡山県　津田麦太楼
尼様が叩けば木魚甘えてる　同　同
口説き得た女の肌の冷たかり　同　同
伊達巻になつてもじらすコツを知り　同　同
旧友とばつたり合つた療養所　高槻市　富山　静臥
初恋はストのお蔭で実を結び　同　同
あゝ惜しい俺ならなあとクイズ聞き　同　同
クリスマスイヴを傷病兵流し　大阪市　佐野　牛歩
初日の出うちの物干にもあつた　同　同
次の客までを年始は飲まされる　同　同
憲法をたてに老父を譲りあい　玉野市　渡辺あきら
良縁へ娘さつぱりとりあわず　同　同
猥本をふせて車窓の雲をみる　同　同
しとやかなつもりか妻の日本髪　岡山県　沖　一糸
汽車にのり女すかさず毛糸あむ　同　同
故郷から書籍にばけて餅が着き　同　同
敢然と右側を往き揉みぬかれ　貝塚市　河楊　梵鐘
不意に物言われ運ちゃんギョッとする　同　同
ヒレ酒に雪のないのが物足らず　同　同
いゝ人があると思えぬ不精ひげ　和歌山県　貝岐　瀑子
聞き返し聞き返し祖母の話好き　同　同
珍らしい事に夫が素で戻り　岡山県　小林　夢介
先妻の子が義理立ての家出をし　同　同
屑蜜柑景品となれば取りたがり　岡山県　長尾　越鳥
捨てた夢ですわと振り向いても見ず　同　同
庭下駄を試歩こは〳〵と履いて見る　岡山県　國枝　朴仙
斗病の夫の顔色見つゝ編む　同　同
眞相は別にもつてる新聞紙　滋賀県　久保　和友

二年生

木村水堂

香林さんの推薦で、不朽洞会員の末席を汚すようになつて二年目の新春を迎えた。戦後の政界では二年生議員でもカバンの威力のお蔭で、大臣の椅子にふんぞり反つているのがザラにあるが、川柳界ではそうは行かない。二年生と云えばまだ序の口である。

私はこの一年間に、私の人生観が変つた程にいろんなことを学んだ。不朽洞会は他誌のような、単なる同好の集合した同人組織ではない。外見は君主制的な組織体に誤解され易いが、内実は、麻生路郎というカナメを中心にした心と心の連繋である。この一年間に眼で視、躰に感じて到達したこれが私の結論である。

過去の歴史が示しているように、何時の時代でも先覚者はその功績に反して不遇なものである。路郎先生も亦、その例外ではない、昭和十一年に凡ゆる社会的地位も名誉も捨てて、職業川柳人を宣言し「川柳雑誌」を同人雑誌から現在の経営態にうつされたことは、歌の文句ではないが、ちよつとやそつとの覚悟では為し得られない。おそらく、当時の先生は、川柳と心中する覚悟だつたろうと推察される。路郎先生のこの勇気の裏面には、葭乃先生の、内助も想像に難くない。「川柳雑誌」が戦時中のある期間を除いて、欠刊なく毎月定期に発行している事実は、斯界の驚異でありそして他誌の脅威でもある。が抑も雑誌が定期に刊行される事が当然であり且つ発行者の義務でもあるのであるが、この当然なことを偉とするところに、当時の柳界の程度が伺

スクターで來る親友もノーマネー　同
挨拶を誰かと見れば配達夫　大阪市　永田都詩子
十八の父一瞬を悔めども　同
酔ふたならうるさいのよ逃げられる　岡山県　光好三四詩
北風えスカートまこと哀れなる　同
人間て死んでしまへばそれきりよ　宮崎市　野口卯之助
世間学入門ダンスもしてるなり　同
還暦の正月とても寒いこと　滋賀県　土守トン坊
妻ももう妬くには淋し歳であり　同
子が無くてお好燒で畫が済み　愛知県　柴田　無方
怒つてる返事ハガキの字にも見え　同
婦長みな肥えて居ります足を見せ　大阪市　吉沢　定行
童貞で死なせた母の愚痴を聞く　同
雪やけの顔でスキーの娘が帰り　大阪市　高橋　幸子
歳暮の嵩を医長が話しあい　同
月給の安いお方の子を宿し　大阪市　伊藤　定美
結婚の否定うれしいものに持ち　同
下駄ばきで通い競輪狂の夢　布施市　大塚　一球
金で済む恋すら出事ぬ吾が儲け　同
看護婦の世話になりなり痰をはき　松江市　名原　古蝶
病んでいて恋の愈悦のぬくぬくと　同
大晦日裸の紙幣をポケットに　岡山県　福島　宵花
年始客娘の縁談のことに触れ　同
福笑ひ子供の方が上手く置き　京都市　高岡　薫
街錄の喋りたそうな顔探し　同
三ケ日やもめいよ〳〵無精なり　貝塚市　武安　嘉彦
肺病と判らぬなどと世辞のよさ　同
初日の出去年と同じ窓だけど　神戸市　小倉へとち
初詣わしはお金のつかい初め　同

肱をつく癖も課長に成つてから　奈良市　絹下　南天
多忙さを思ひ知らして妻は病み　同
腕組んで麦を踏んでるだけのこと　岡山県　穂北ペン郎
掌の蜜柑冷たい貰い物　同
トンネルを待ちかねた手がぢち來る　貝塚市　永吉　喜好
同病の身につまされる自殺記事　同
新任の三船敏郎に似た教師　金沢市　篠原古戦場
煙草屋のお紙幣のしわを伸す仕事　同
党籍は右派でも口は左派であり　岡山県佐々部満佐志
子の夢を残して柿の一つ見え　同
失職の肩書淋し古名刺　津山市　田口今日坊
あんな声妻にもあつた猫を呼び　同
別居とはいづれ他人になる仕組　大阪市　岩垣一点子
車には乗らずじまひの靈柩車　同
パトロール畫の娼家を見て歩き　福岡市　岩田十三楼
初めての社宅で母を呼ぶ手紙　同
担屋もお守り袋を下げてをり　岡山県　井谷　清
お雑煮へ記錄を出して子は育ち　同
寒風へ硝子一枚新にする　愛媛県　鳥井　川鳥
矢印しえ行けば税務署警察署　同
事故かと見れば花嫁降るとこ　石川県　桑山　とよ
借金は妻に内緒で飲んだ金　同
青春を描き続けし人に逢ひ　和歌山県　美野百合子
新年のクイズ七福神も出る　同
避妊して時代にマッチした夫婦　出雲市　日野加壽緒
貰われぬ土産と知らず礼を言ひ　同
松の内叱らぬ事に努力する　高知市　松下　蘇水
酒組と歌留多組とのお元日　同
後任はどうやら赤い様子なり　呉市　松永四季無

えるのである。

先生は事川柳に関しては、自己の信念に反することには絶体に妥協しない。そしていかなる権力にも屈しない。だから一見取りつき難い威圧をすら感じる。これが往々にして曲解を招く所以であろう。しかし、その懐ろに飛び込んだら案外人間味の豊かな好々爺であることを発見する。私は幼少に父を失つた故もあるが先生に対し、師弟の線を越えて自分の親父のような近親感を覚えるのである。（これは礼を失したことではあるが）先生のお宅へ二、三度参上したが、雑談の都度、山雨楼氏の話が出る。その時の先生は慈父のような顔である。「しかし奥さん」という山雨楼氏のニックネームを知つたのもこの時である。しみじみとこの未見の先輩を羨ましく思つた。ある時、鮎美さんとの同座で洋酒の御馳走を受けての帰途、鮎美さんが見送つて下さる先生と肩を組みながら「先生（路郎）じろじろせんとこつちへ歩み鮎寄んなはれ」「こいつ、いつもこんなことを云いよる。」と睨じく行く姿は、晩春の街にほのぼのと匂う一幅の名画だつた。「ある先輩がいくら叱られても離れられない。」と云つたが、同感である。路郎先生は剣尖するめのよ

山銀の瓶
大阪市大淀区長柄
西通一丁目四四
山銀硝子株式会社
電話堀川四四七番

女湯の流行柄は話だけ　同　玉野市　迫田美婦適
正直を買われてやつぱり貧乏し　布哇　滝　純香　岡山県　難波　鴻峰
先輩と呼ばれ夜学にまだ通ひ　同　泉　北鳥　同　高野　宵草
女房の土産喜ぶ年になり　鳥取市　同　熊本市
行商に炭鉱ですかと念を押し　岡山県　高知県　岡本　元馬
樂天家肺病の二期も克服し　岡野風の子　尾道市　渡辺伊津志
因習を破つて茶菓の披露宴　同　村上　旭堂　大阪府　森本黑天子
言ひ過ぎたことを日記え小さく悔い　愛媛県　同　亀崎　漫歩　高田市　戸田　嘉一
だまつてゐる方にも寒さこたへたり　鳥取県　同　岩見　キヨ　大和　野田　勝豊
ボーナスが出たんですかと包解き　京都市　同　小西　雄々　高田市　白崎　正男
一泊の客に子供等部屋を明け　岡山県　岡本　薫翠　京都市
まだ自信あるのか女別れませう　同　谷脇土佐兒　大阪市　岡　山子
背を見せて妻持久戦の構へとる　高槻市　同　戸田　悅子　大阪市　丹波　太路
正月の氣分にひたる牡丹雪　大和　高田市　同　菱川　正美　鳥取市　星野　侑正
千円の賽錢を見た初詣　高田市　津山市　岡山県　古谷　馬洗　出雲市　新宮　健兒
借金取今日こそ去らぬ腰を据へ　岡山県　岡山県　繁松　玉露　岡山県　國正田吾作
四疊半震へた頃は若かりし　同　大阪府　中谷　卓兒　森　彦六　岡山県　松村　怠坊
ダイヤルのつまみも剝げて病みつづけ　高槻市　大阪市　長田　塗杖　京都市　手島　巨船
何時の間か師走を嘆く年になり　大和　高田市　大阪府　岩見とくじ　京都市　山上　京花
故郷の川の流れも春の音　大和　高田市　大阪市　小田　柳叟　大阪市　中峯　芳扇
むりやりに買わされたのがよく似合い　大阪市　大阪市　沢田　亀洋
共稼ぎ娘時代の夢むなし　岡山県　岡山県　西山　節子
やせ樂そつと飲んだが効きませぬ　岡山県　大阪市　岡田　有泉
後添へ解けぬがまゝでもう嫁ぎ　大阪府　大阪市　竹内花代子
轉落へ故郷の山が綺麗すぎ　大阪府　岡山県　小池しげお
生きるだけ生きん餅焼く指白き　岡山県　岡山県　池田　古心
入れ智惠をして下からの声にする　岡山県　兵庫県　竹内　圭三
落ちぶれた土藏の暮しも亦樂し　岡山県　岡山県　中尾　貞教
正月の氣分の盡きる雨に暮れ　岡山県　岡山県　小坂田雨水
下駄に灸すえた効目をおかしがり　岡山県　森川　東南

二等車へ一駅乘つて戻つて來
元旦に歩くは下級社員なり
御馳走になつてから聞く誕生日
性なれや妻妻たらず〳〵
引きしめる世帶の嫁をけむたがり
世の風にとう〳〵なびく未亡人
違ひ棚成程こゝも女の子
はかなさを父ゆきし後の出入に知り
停年の父へ我娘のませた口
証人の仲居汚職を聞かされる
筆不精わびていも判捺して來る
雜音を入れる息子を眼で押え
先妻が胸を病むとか言ふ話し
買ひそうな客をマネキン目で捉え
思想が違えば生命哀れなり
來客にてんやわんやの新世帶
酒はよし元旦またす飲みつづけ
晴衣着ると手振まで違ふ頑是なさ
お雜煮へ記錄を出して子は育ち
盗人も買うらし十一日の笹
祝ひ膳ポートワインで笑ひ合ひ
板壁の建てよう隣の意地が見え
命までかけた恋とは後で知れ
紋付のまゝで年始がよいつぶれ
クリームの香りもせぬ老妓酒の酌
押賣へ女中ですのと言ふた妻
夜が明けりやあの情熱がかしとまり

聽診器のいらぬ　前額部診察

北川春巣

私は最近妙なことを発見した。私は男の子を三人持つているが、長男の髪の生え際は、私の若かりし頃（長男出生当時）の私のそれに似て居り、次男、三男になるに従つて漸次生え際が後退して三男が最も禿げ上つており現在の私に最も近い。三男は五才になるのだが、五年前の私の生え際を持つて生れ出たのであろう。そう思つて、次男を見ると次男の生え際は長男と三男との中間型で矢張り、次男出生当時の私の禿げ方を受け継いでいるものと、ほゝえましくなる。

「惣領の甚六」と云う言葉があるが、して見ると次男は頭髪の生え際のみならず、頭の中味までも当時のものを貰つて生れて来従つて未熟であり、三男は私の進んで来た禿げ上り方のみならず、脳味噌をも受けて来ている様に思う。此の点惣領が「甚六」であるのは、当然な様に思うが、惣領で名をなした人も歴史上枚挙にいとまがない位であるから、勉強次第ではどんなにでも偉くなれるらしい。現に私も長男であるが私の長男に見る生え際の時代から、三男に見る禿げ上りの時代を経て、今日では一層禿げ上つて居るのである。（筆者は医博）

川柳雜誌

バックナンバー御入用の方は往復ハガキに希望号数記入の上問合されたい。

一路集

勘定

土井文蝶 選

お勘定たゞ締高が書いてあり　良坊
勘定日迄と一札入れて置き　翠風
おつゝいでの時でいゝわと酌いでくれ　芳泉
薬石も空し勘定だけ残り　ペン郎
勘定の日数を雨にたゝられる　莽花
勘定を一ぺん済ませ場所を変え　天信
役得を勘定に入れ就職し　英子
水増へ女将愛嬌添へて出し　寛虚
勘定ぢやおへん女の意気地どす　凡九郎
髭のある方へ勘定書を出し　方大
妻楊枝くわえ勘定払わす気　しげお
勘定になつて友情冷えかける　十九平
高うつきましてと勘定書へ世辞　トン坊
酔つてゝも徳利だけは勘定し　忠美
物事を勘定づくでけちな奴　嶺南
割勘も検察庁へ呼び出され　仙坊
勘定場へ持ち込んで来る腕時計　嘉一
勘定へ竹輪一本入れ忘れ　今日坊
勘定の事で新婚もめかける　いつし
一男二女妻の勘定高いこと　一角
勘定をしたかせんのか二日酔　暁舟
割勘のつけが机を廻つてき　東南
正月を両方の手で勘定し　千石
馬連れて勘定足らんのが帰り　徳次郎
勘定をゆずり合ふてる女連　岡山子
割勘で飲むスタンドの味気なさ　破天荒
勘定の額に一座の酔がさめ　代仕男
割勘でクラスメートは喫茶店　文笑
勘定がすんで山吹いろのお茶　大然
勘定日子はあてにして起きてゐる　都詩子
勘定の不足を幹事うめて置き　光郎
女の子銘々でもつ汁粉代　桂角
勘定も一桁違う穴をあけ　満佐志
勘定のミスが会計徹夜させ　呆声
割勘の釣銭でパチンコまたはすみ　鮎美
出し損のやうな勘定立替へる　木魚
お大尽へ勘定書を突き付ける　千容
勘定書ゴクリ動いたのど仏　爽信
割勘で提灯持をさせられる　田吾作
算盤をぱちりとそれでよろしおま　一点子
勘定は服の仕立が気に入らず　古蝶
鮮かに勘定またにして帰り　谷水
勘定の割に女は惚れぬなり　味平
勘定書銚子がたつた二本やで　日満子
ヘソクリへ勘定書を書き替える　大阪牛歩
勘定へチップも添へた下心　一平
勘定もせずに転勤する巡査　青柳
醜態も話し割勘集められ　古戦場
勘定を延して店へ逃ざかり　卜占
勘定書見てから財布をみな集め　美婦適
勘定を糧米でする年の暮　古心
駅数の勘定もして夜の汽車　南天
紙幣の皺のばして母は勘定する　葉光
勘定科目簿記をしつかりやり給へ　摩天郎
別勘定あるを税務署見附けたり　太路
勘定日なんだかんだと差引かれ　正郎
勘定へ気前見せたい人が居り　怠坊
駅数の勘定もして夜の汽車　一瓢
紙幣の皺のばして母は勘定する　悦子
勘定科目簿記をしつかりやり給へ　鉄児
別勘定あるを税務署見附けたり　太路
勘定日なんだかんだと差引かれ　正郎
勘定へ気前見せたい人が居り　怠坊
勘定日給仕つくづく嫌になり　一瓢
勘定へ竹輪一本入れ忘れ　悦子
勘定をゆずり合ふてる女連　鉄児
割勘で飲むスタンドの味気なさ　日本村

船

築山快夢起 選

船の旅子は親心知らず乗り　吉男
すみついて船を労はる心湧く　逸
ロマンスも自殺も乗せて船の旅　寛峯
汽車汽船器用に画けて守さゝれ　黒天子
バンバンも送つて来てる渡米船　摩天郎
あの船へついて行きたい恋であり　芳泉
鳴るドラ（もう一度大きく左様なら　天信
船の帆が鼻先通る漁師町　莽花
牡蠣船へ母と連れだつ国訛り　寛虚
祖母様が明日の船出へ繰る暦　凡九郎
軍艦は海底だけにあつてよし　鉄児
今日もまだ見えぬ日本を待ちあぐむ　仙坊
船世帯夕立雲へ桶を出し　悦子
夢はるかアメリカへ飛ぶ白い船　和友
好い船で瀬戸内海がせますぎる　爽信
クレヨンの船は大工が下手らしい　恵二朗
テープ切れハンカチで追ふ船のあと　風の子
家出した娘に船脚のをそすぎる　千容
フリゲート船か艦かで揉めて居る　木魚
療養の窓から船をなつかしみ　一瓢
難波した笹舟へもう日が暮れる　香平
マドロスの恋は帆先にまかしとき　日満
湧船数十ふと出陣を想はせる　怠坊
釣りに出る船へお守り提げて来る　眠
忙中閑船長金比羅まいりする　正郎
磯釣が口惜しがつている沖の釣　古蝶
ポンポン船船場の間借り病んでいる　葉光
船世帯こゝにもこんな幸があり　日満
船出する顔へ鯨の夢ものせ　怠坊
波静かかもめも船へ見舞に来　眠
大船に乗った気ですわと借りられる　美婦適
別れ船テープ何処まで繰くやら　徳次郎
船の着くうわさ女将は待ち構え　方大
島育ち隣の島へ船で嫁き　美能留
船火事や隣近所が漕いで迷げ　嶺南
連絡船ちつとは洋行気分が出　忠美
鉄ばかり組んで浮くとは思はれず　嘉一
白い船見送る富士へ投げキッス　今日坊
船べりに襁褓干してる良い日和　とよ
船世帯浮世はなれたように住み　巨船
日の丸を涙であふぐ船がつき　潮花
アマゾンへ移民か棄民が船出する　朴仙
渡し守酔うて川止め札を出し　満佐志
引揚船あいのこ連れた母も居り　破天荒
鏡台に初日が写る船世帯　雄々
からかいを日傘で受ける渡船　味平
産声を船であげたで船で死に　古心
渡し船引返へさせる村のボス　光郎
連絡船はしけは孫の様に見え　天明
スケッチの此処らに船のほしいこと　一善
船の静かな朝霧に故郷の山々　鮎美
三等の船室ぼつ〳〵辛くなり　千石
船旅の母を案じる風がなぎ　岡山子
一瓢佳・見送りの女中テープを義理で持ち　卜占
香平佳・絵になって居るとは知らぬ帆掛船　彦六
日満佳・借り船で海上保安の型が出来　田吾作
怠坊佳・腹が立つばかり遺骨の船がつき　芳泉
眠佳・岩壁へ船の巨きさだけかげり　古戦場
正郎佳・笹の船坊やの夢をのせて行き　翠風
古蝶佳・船唄が出る頃船の帆が孕み　トン坊
葉光佳・入港の船の汽笛にある個性　太路
日本村佳・日の丸が眼にしむ初の日本船　暁舟
千流佳・漁り船こぼれたように灯がともり　桂角
美婦適軸・船唄に英語もまじる艦船　快夢起

初鰹代と江戸通貨（下）

阿達義雄

扨、中流庶民の取つ付き得る値段は、先ずの処、金では一分、錢では一貫文（一千文）位のところと思われるが、三分の句が遊女の畫三（三分の上妓）と結びつけられ、

○突出しの鰹価も三分なり

というのがある。「突出し」は初鰹を意味すると共に、遊女が初めて見世を張り、客に接する突出し、或は新造が姉女郎を後楯に頼み、一廉の花魁と成り其の披露として、吉原中の町へ八文字を踏む突き出しの語を匂わしている。尤も、突出しに三分というのは極めて稀であつた。明和九年の『譚嚢』には、

◎ 鰹

郭公の初音を聞いたの聞かぬとの話の中へ出て、「おらあ昨日鰹の初ねを聞いた。」「途方もない事を言やる、何鰹が鳴くものだ。」

「それでも昨日、初値が一貫五百だと云うた。」

とあり、天明八年の「評判の俵」の中には「鰹の初値が二貫五百」と書かれており、更に安永八年の「鯛の味噌津」という笑い話集には、

◎ からし

二三人寄りあひ、「なんと芥子蠶をして食はうではないか。」「ヲヲよかつた。然し、芥子は腹を立つてかゝらぬと利かぬから、おのしむつとしてかきやれ。」「ばかな事を言ふ。そんなにやすく腹が立たれるものか」と言ふ所へ、「鰹魚々々」とよんで来る。

「コレ鰹魚はいくらする。」「アイかけねなしに一貫さ。」「ソレはとんだ高いから片身買おう。」「そんなら五百だがよしか」と、半分にずつとおろす。「イヤもう厭になつた。買ふまい〳〵。」「ナニ馬鹿々々しい。一貫の鰹魚を半分におろさせて買おうの買ふまいのといふ事があるものか」と、真黒になつて腹を立てれば、「ヲット芥子をかいてくんねえ。」

之等によつて見ると、まあ一貫文或は金一分というのが、この頃初鰹としての恰好の値であつたらしい。

安永頃出た「柳多留」十二編十五編の句は之を裏書きしている。

○初の字が五百鰹が五百なり（一二）

——合わせて初鰹となれば一貫文。一千が一貫文である。

○酢と芥子買ふ程一分のが残り（一五）

——一分の金で初鰹を買つて酢と芥子を買う位の錢だけが残る。酢と芥子で食う。（刺身の場合）

酢と芥子を買うだけの錢が残ると云うことは、後にいくらも錢が残らなかつた、と云うことである。川柳によれば、芥子も酢も三文で充分買えた。「ひどい事下女三文で子をおろし」（末摘花四）や「三文が酢を買つて來る能がかり」（一六二）などの句が之を証している。

文化の頃の、句にも、初鰹代一分のがある。

○さかなやに一分の首をおとされる（天明七年繁1）（三〇）

尚、代價は不明であるが、天明の句に、

○下戸が出て二百引かせる初鰹（川傍四）

などになると、矢張り一貫文卽ち一分位のものと思われるし、

○初鰹気は心だと百ねぎり（　）

も、一貫文を稍下廻つた錢高の場合であろう。鰹の産地である鎌倉附近に関連づけた句、

○鎌倉の魚も黄金の札を付け（六三）

——高価な魚だから値札に黄金の札を附けるという洒落で、頼朝の放した千羽鶴に黄金の短冊をつけたに思い寄せている。

○片瀬でも錢で買はれぬ初鰹（四五）

——産地だからといつて廉くはない。

次に初鰹の高價な事を、側面から詠んだ句を考察してみよう。

○初鰹俎板の箔小式朱金（八四）

小式朱金は文政七年に新鑄された、方形の微小貨幣たる文政壱朱金の異称で、其の重さは僅か〇・三七五匁という前古比を見ない小形のものであるが、之を高價な初鰹の鱗の一枚一枚に比して、一つには鰹の高價を、一つには此の小貳朱の小ささを諷したものである。

○其金で鯨を買ふと伊勢屋言ひ（七四）

——一両も二両も出して不経済な初鰹など買うよりは其の金で。

○初鰹錢と芥子で二度涙（五四）

——痛い錢をうんと出して涙食べる時芥子で涙。

○人間値かなことゝ買ふ初鰹（六六）

——永く生きられる命でねえ高くてもかまうものか。

○初鰹女房に小一年ほど言はれ（一五）

——「無理をして初鰹なんか買うから、こんなことになるのです」などと。

○芥子味噌錢で買はれぬうちのこと（二三）

——芥子味噌をつけて喰う初鰹は。錢で買う頃になつては駄目須く金で買うべし。

右句は、寛政元年に成つた「柳多留」二十三編のものだが、此の頃は、通貨としての金貨幣は、小判金と一分金だけである。従つて一尾一分以下の値段になれば、錢の値で買わねばならぬ。（尤も、銀貨幣なら南鐐二朱銀や小玉銀もあつた。）

○春の末銭へ芥子をつけて食ひ　（一二）

では、余りパッとしない所以である。

鰹も其のはしりこそ初鰹で高價だが、鰹賣が賣りに來る回数が重る毎に廉くなる。

○十かへりも来ると下直な松の魚　（七四）

——「下直」は下直、松の魚は鰹。

斯うなると義理にも初鰹とは言えなくなる。

○腐れてくると十六に売つてやり　（十五）

○十六本すると犬迄食ひ歩き　（一七）

前の句の十六が、十六文でなどないことは、後の句と照し合わせて見るとよく分る。即ち一両で十六尾である。もし、此の頃一朱金なり、一朱金があつたなら、一尾一朱とも言われるわけだが、安永元年には二朱銀が出たものゝ、未だ一朱の貨幣はなかつた。

川柳の定石に於ても、江戸貨幣の法定比價に於ても、一両に十六本なら、一本二百五十文となる。然し、この頃の銭の相場は、少し下落していたので、実際に於ては、一尾三百文以上の勘定になる様である。「腐れてくると」は誇張であろう。尚、文政の句に次の様なのがある。

○三百の鰹天窓へ緊縛児（きんさいじ）　（一〇八）

——「きんさいじ」と云うのは、玄装三藏の訓戒をきかず、孫悟空が其の頭に嵌められた金輪で、この輪が頭の肉に食込んでいて、三藏が呪文を唱えると悟空を痛く緊めつけるのである。（西遊記）

三百文位の安鰹では、翌日頭痛鉢巻をする覚悟が要る。三百文などは、未だ安鰹としては上等の方と云うべく、煮なければ危険のしろものが多い。

○あらかじめ頭痛承知で百に付け　（五三）（一五三）

——百文に値をつける。

○こちらで鉢巻をする百鰹　（一六七）

——鰹売が鉢巻で威勢よく来るのは当然だが、百文の安鰹を食う様な手合も。

○百すると大道中が天窓（あたま）なり　（一五）

——あちらでも、こちらでも鰹を食つて、其の頭を捨てる。

○煮るやうに切つてくんなとお百いひ　（　）

——「お百」は百文で鰹を買う女の疑人名。

○ほんの毒魚を百出して伊勢屋買ひ　（六八）

心臓の強い女になると、小判の化神ともいうべき此の魚に、

○初がつを内儀こわ〳〵百に付け　（四）

かと思うと、

○百で買ひ刺身にしようは何事ぞ　（一五七）

と川柳子に叱られる輩もあつて、江戸の世は様々である。其の様々の中でも、扨どん尻に控えて安物買いのレコード・ホルダーとなつているのは、御多分に洩れざる伊勢屋というところだ。

○大伊勢屋古せを二本百に付け　（二五）

——「古せ」は、鰹の盛りを過ぎ、秋の季になつたもの。

一本五十文とは、付けも付けたり、流石は伊勢屋の古舗の、大伊勢の伊勢屋たるところ。

但し、高價な魚を、無闇向う見ずに買うからといつて、「目には青葉山ほとゝぎす、」の後に並べられて、発句にされる訳のものでなく、要は、魚の中でも鰹たることが大切、それも初鰹の威勢のいゝ処を、威勢良く買うことで、いくら高價でも、初代伊勢屋の様に鯨などでは、川柳にはなつても発句にはならない。

○五六貫しても鮪（まぐろ）は句にならず　（一四三）

（完）

近頃娘気質

麻生梨里

近頃の川柳に十八九を詠んだ句が非常に少ないが、確かに十八九と云う言葉は今は昔になつたと云う感がある。「あわれ十九の春よ春」なんて唄つたのは昔のこと、近頃の娘さんはもつと〳〵現実的である。

吹くとも見えぬ風にハラリと舞い落ちる落葉を見て世の無情を感じるよりも、春の夜のおぼろ月を見て泪を流すよりも、何処においしいお好焼屋があるか、それを誰におごらせるか、と云うことの方が遙かに興味があり、お腹がふくれると云うことをよく御存知である。

小原稿を募る

題は「私の柳友」—「私の」に特に注意、大先輩を柳友扱いしたのや、ウンと後輩を柳友扱いしたのは採らない。長さは四百字詰原稿用紙一枚程度。特に締切日はきめないから随時寄稿されたい。取捨は編輯局にお任かせ願いたい。（編輯局）

麻生路郎著　水武書房版

川柳を研究したい人にも好適の書

本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものかから」説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書である。敢えて一読を薦む。

B六版（二一二頁）改正定價一三〇円　送費十六円

取次御注文は　大阪市住吉区鷗内芳代四五丁目二五　振替口座大阪七五〇五〇　川柳雑誌社

いのちある句を創れ

天地柳壇

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社新春川柳會（大阪）

一月十日　午後五時半　於光明寺

今日は廿七年度の不朽洞賞優勝カップ獲得決戦があるというので、登場の権利ある人達は自信満々たる顔で会場へ現れた。路郎師の柳話は旅の事其他に就いて話され、出席者全員の紅白試合も賑々しく、嬉しそうに取り交される短冊交換もあつて句会は如何にも春らしい雰囲気を作つた。路郎師の選により廿七年度の不朽洞優勝カップは土井文蝶氏が獲得するところとなり、席題、兼題の披講後当夜の不朽洞賞優勝カップは長田鉾杖氏が把握した。閉会九時。（幹事）

出席者＝路郎・風路・没食子・文蝶・嘉一・悦子・広美・小松園・古方・沐天・潮花・夢裡・玲人・一十・春柳・紫香・紫郎・勝豊・栞・淡舟・正則・百生・ひろし・鉾杖・香林・春巣・友鬼・巣澄・句軒・朴堂・都詩子・幽王・帆加夫・喜久堂・梅里・正司・葉光・水堂・鹿の子・しげを・圭三・天貪・酔歩・小将・柳蛙・実・京子・抄児・三司・黒天子・摩天郎・義英・十字路・清潮・梅志・雅巣・凡九郎・水客・恒明・貴山・鮎美・木人・夢生・俊子・中歩・愛論・史葉・博・へとち・里十九・雄声・泡起・葭乃・梨里

兼題「吉日」　麻生路郎選

吉日を打合はしてるふすまごし　夢生
情熱へもう吉日が待ち切れず　幽王
吉日のそれから母の疲れが出　正則
やとはれて隣の嫁の荷を担ぎ　日満子
吉日の髪は電車で結いにゆき　小松園
日曜が丁度吉日見合さす　日満子
さからわず今日吉日としておこう　古方
吉日と言ふに借金とりに来る　圭三
吉日が決つてからの家出なり　小松園
吉日ももう気にかけず生きており　少将
吉日へ母さんも結ふ小さい髷　抄児
人生の門出挙式は電休日　香林
吉日に母の病が気をもませ　清潮
吉日にだだこねてゐる一人子　小松園
嫁の荷を交通巡査もうれしく見　紫香
降る程に照る程上吉日目出度がり　十字路
賀の祝ひ今日一日は叱るまい　文蝶
吉日をお天気ばかりほめて居る　三司
吉日はお酒制限解除され　木人
長年の誤解がとけていたわられ　沐天
朝からの酒吉日の味がする　春巣
吉日の鏡へ母もゐてくれる　潮花
吉日の朝から鯛を焼く匂い　淡舟
葉牡丹の影吉日の袖が揺れ　鹿の子
吉日の熱海の宿を予約する　正司
ミシン置きかえて嬉しい坐が決まり　水客
吉日のこゝも棟上らしい音　勝豊
吉日へ久しぶりなる花を活け　ゆづる
金襖吉日の灯を跳ねかえし　淡舟
吉日へ神主今日は立ちどほし　凡九郎
吉日をえらんで退院少し延び　日本村
吉日は老先生も微笑浮き　紫郎
モーニングのまま箸持つれしい日　鉾杖
吉日へ内輪の客が酔ひつぶれ　酔歩

兼題「白足袋」　水谷鮎美選

白足袋が印象的な舞扇　夢裡
社長今日白足袋をはく観世流　抄児
白足袋をぬいできれいな嘘を云ひ　酔歩
白足袋もおしやれの中に数へられ　雄声
獅子舞の白足袋笛に踊らされ　満佐志
自動車へ消える女の白い足袋　一十
白足袋がくづれてからの目出度い座　紫香
和服が似合う教授の白い足袋　古方
厚生は白足袋はいた第一歩　里十九
白足袋の汚れ女の道護る　小松園
白足袋で来て歌舞伎座の桟敷の五　三司
白足袋で師の慶びの司会する　日満子
白足袋に紅緒がにじむ宵の雨　都詩子
白足袋の白さへ畳よくすべり　春柳
白足袋の父に無心を云ひそびれ　香林
白足袋を履けば無口な娘になって　淡舟
もみ手する京の主の白い足袋　愛論
うす糊がきいてる母の白い足袋　栞
白足袋で来た貫録を写される　恒明
まん幕のはしでチョロ〳〵白い足袋　紫香
白足袋をはいて浮世をごまかさん　里十九
白足袋履き換へて大胆になったおもふ　小松園
白足袋を脱げば夫人に夜が来る　幽王
緋を少し見せて白足袋はきかへる　愛論
白足袋のまゝでミナミを飲み歩き　帆加夫
白足袋が明治生れによく似合ひ　水堂
白足袋もむちやくちやですわ宵戎　風路
白足袋を干して色街静かなり　しげを
白梅の小径その白足袋の月あかり　鮎美

兼題「要求」　菊沢小松園選

まとまらぬ要求毛布もちこまれ　句軒
立札で立退き要求されてゐる　しげを
要求の署名書く丈書いて置き　句軒
神官の要求みたす墨をすり　正則
おつちよこちよいが要求もつてくる　栞
要求の半分ですと要求し　ひろみ
要求は寒さと共にやつてくる　百生
要求がそれ〴〵違ふ子沢山　紫郎
要求は本省へ行く三等車　玲人
要求書じろりと社長無口で居　日満子
要求を満たせば不足さがし出し　葉光
瞳の色で知る要求を瞳で返し　沐天
要求書ストの日取りを決めて出し　紫香
要求は国際指数といふ数字　凡九郎
要求が通り悔ひなき日を数へ　潮花
要求の強さ民主の名にかくれ　香林
要求に予算が悲鳴上げてゐる　没食子
要求はしたが会社は潰されず　香林
要求がただいぢらしい児の病気　幽王
要求を通して添ふた二階借り　一瓢
要求をあつさり逃げた女の瞳　圭三
要求もあの線まではきくつもり　東南
要求をはつきり云はぬ父なし子　京子
要求がこぢれアッサリくびになり　梅志
要求を祕めて今宵は歩くだけ　満佐志
要求をされて女の思ふつぼ　沐天
要求がかわるがわるに口を出し　梅志
要求を通せば四面楚歌の声　へとち
要求がはずれ二号のまゝ死に　潮花
要求が妻にもあつた洗濯機　三司
要求へ折れて来るのを待つてゐる　文蝶
本妻の要求矢張りおとなしい　東南
里帰り借りる話もことづかり　摩天郎
要求を笑つて入れて酌いでやり　葉光
要求の通らぬまゝに飯にする　小松園

席題「配達」　西尾栞選

小児科
内科
性病科
安岡医院
安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁浜側
電話南㊱三二四六

督促の電話へ配達出たと言え　梅里
お歳暮の配達がくる門がまえ　圭三
トラックで来た大丸の特価品　酔歩
配達の帰り女中に使われる　塗杖
配達へ念を押してる二階借り　鹿の子
新聞が一日遅れて来る故郷　抄児
朝刊の配達ねぎらふ雪の朝　葉光
電報の賀状一家をあわてさせ　酔歩
配達をおえて夜学の道につき　勝豊
無口なので配達へ廻される　幽玉
配達はチトせわしない男なり　春巣
配達の今日ぬかるみをいたはれ　栞

席題「いけ花」　戸田古方選

いけ花がどこやらすねている姿　貴山
いけ花の手並をほめて茶のにがく　淡舟
新しき生花へ大木運び込み　百生
免許の手前先生の手も添へる　黒天子
まがつてれはいけ花立派に見えおり　木人
盛装でも一度生花なほして見　紫香
生花の椿へ寒の水をくみ　文蝶
生花を袖でくずした歌留多の娘　都詩子
病む父へ娘は花を活けつづけ　清潮
玄関が狭いに梅が枝を張り　夢裡
いけ花に蝶々も止まる応接間　みのる
若水をくんで椿を生ける床　文蝶
いけ花会師匠はいけたとは言はず　摩天郎
柿一つ落したところ鯉峨末生　酔歩
病室も春の気分の花をいけ　没食子
倦怠期チヨコ〳〵花も活け替へる　同
勅使河原舞台装置のやうに活け　正司
生花の鋏の音も春となり　文蝶
六角の辻で待合ふ池の坊　正司
いけ花を教へ不遇な鋏だこ　鹿の子
いけ花も茶も習ふてホールの灯　嘉一
いけ花へまだ赤ちやんがないそうな　幽玉
木に花を差して前衛流とか云ふ　三司
花鋏今マニキユアをしたばかり　十字路
いけ花に慰められた旅帰り　悦子
真直に帰る娘は花を持ち　風路
いけ花の上にならんだ人の顔　水客
いけ花の無い床の間で火鉢置く　塗杖
もうこれが最後と思ふ花を活け　水堂
いけ花の蕾とにかく咲いて見せ　葉光
恐妻の今日いけ花のつゝましく　春柳
末生流ですと気のない返事なり　春巣
共学以来花が入つている便所　古方

席題「散髪」　市場没食子選

油ぬけして散髪に出かけたり　鮎美
散髪で破れた雑誌よんでくる　ひろし
お安くないぞと散髪ひやかされ　梅里
母の気にいらぬ散髪のぼしかけ　水堂
散髪の耳に浮世のことも聞き　摩天郎
退院の散髪嬉し油つけ　少将
お子達は早目にと暮の散髪屋　都詩子
散髪で聞いた噂を持ち帰り　一十
人様の結婚式へ髪を刈り　春巣
散髪をしても振られる顔であり　正司
散髪をしてもせんでも一人者　清潮
虎刈りにされる頭を母に出し　句軒
散髪をして行く当もなし春の宵　文蝶
正月の頭になつて出る床屋　三司
散髪もせず稿料を酒にする　正司
共稼ぎがつちり場末の散髪屋　悦子
散髪のあとの白さも床払ひ　同
逢ひに行く日の散髪を忙がせる　文蝶
散髪に昨日と違ふ顔でくる　摩天郎
散髪をしてから風邪を引きそへる　葉光
おとがいを引張り出して剃つてくれ　酔歩
散髪の頭へ宿のかた枕　水客
若作りに刈つても白髪承知せず　黒天子
修学旅行みんな散髪した頭　しげを
全快のやつれ床屋で知つて来る　句軒
散髪の仕上げポマード天瓜粉　清潮
散髪も正月と云ふはかしよう　梅里
散髪屋へ気兼な頭病み上り　悦子
散髪をしたから正月来たごとし　幽玉
子をあやす術も知つてる散髪屋　圭三
散髪に出かけたきりの自殺也　鮎美
百二十円だけ前上げて来る　抄児
子沢山兄から順にかり始め　勝豊
さんばつや頭のはげたのは云はず　木人
散髪の型もアバンは気に入らず　文蝶
十日戎もう散髪を気にし出し　没食子

不朽洞賞カップ優勝決戦

席題「都会人」　麻生路郎選

人つきのけて〳〵都会人　潮花
ハイヤーを呼ぶ手もなれた都会人　夢生
都会人として海を恋い山を恋い　抄児
都会人パンとコーヒの朝にする　淡舟
とりいれもよたに都会人のよどこの手　梅里
ストに馴れ停電に馴れ都会人　幽玉
パチンコをしなきや寝られぬ都会人　春巣
べんちやらでもあかぬけしてる都会人　栞
身を飾ることに都会で痩せており　香林
都会人アバンとしての跨り持ち　文蝶

席題「村」　麻生路郎選

破算した村で大臣生れたり　栞
親切な村振り返り〳〵　鮎美
闘病に帰れば村は狭すぎる　春巣
村の灯へ遠くカジヤの火花散る　文蝶
因縁を残して村を立つ役者　三司
このダムの底に昔は村があり　水堂
風呂敷を包みかへてる村はづれ　愛論
自動車で行けば村人寄つて来る　喜久堂
医者のない村にもパチンコ屋が出来た　梅里
太りゆく村を帰省は見て帰り　没食子

雑川　**梅田支部句会**（大阪市）

一月八日　於阪神ビル

水谷鮎美報

末吉のみくじ今年も張切つて　夢生
初みくじ母娘おんなじくじを引き　一夜
帯とけばみくじが落ちる初詣　三司
初みくじ善男善女へ薄氷　鮎美
初みくじ鳩の生毛の落ちきたる　石竹

雑川　**阿倍野支部新年句会**（大阪市）

一月二十七日　於　近映地下直営食堂

須崎豆秋報

無茶苦茶にされても妻へよく仕え　正司
無茶苦茶を通しただけの五十年　夕霧
青春を無茶苦茶にしてはでに生き　義広
停電に無茶苦茶となる村芝居　玲人
エキストラ今日無茶苦茶に走らされ　一香
無茶苦茶を言ふだけ云うて社長去り　貞女
無茶苦茶に引張り込んで酒をつぎ　ひろし
飲み助で社長に顔をよく知られ　かよ
無茶苦茶でおまけに女房かけ合う気　しげお
無茶苦茶をするとは女思へども　豆秋
無茶言ふて辞める若さのちやまし　好郎
開店の花輪を税務吏見てかへり　勝豊
大臣の花輪は色のあせるまで　白柳子
私が贈りましたといふ花輪　凡九郎
肩書をつけた野心のある花輪　日本村
花輪にも順序があつた列べかた　三司
振袖に十九の頃の夢があり　晴峯

東京そばと
灘一どすじ
アベノ橋地下映画食道街
梅里の店
大萬
★大万川柳（第廿四回）を募る
兼題「妾宅」路郎先生選
締切・三月十五日　句数五句以内
発表・三月廿一日（店内に掲示）
御投句は大万宛・どなたでも

振袖もちらほら日本らしゆうなり　香林
プラカード持つ振袖の戎ばし　勢三
振袖を子にせがまれて春かなし　植村
振袖の手は仲人にまかせきり　潮花
福引のまかり違へば当りそう　唯義
福引は俺が引こうかふところ手　井竿
福引へ当るもんかとかきまわし　梅里
声が大きいので福引へ雇われる　幽玉
福引であたつた様な妻を持ち　一瓢
福引へ大の男がならばされ　文蝶
のこされた呑み助同志くやしがり　勝豊
噸死した呑み助身よりなまお通夜　鮎美
隅つこの暗さへ呑み助うまが合い　万滴
呑み助のくせでタバコをおいて去に　梅志
呑み助が線路づたいに帰つて来　文蝶
又呑んで来たなと思う赤い鼻　古方
呑み助の横に呑み助坐るなり　賢二
生酔の内はお釣を勘定し　光風
呑み助と呑み助金を出し借しみ　いわを
呑み助を淋しがらしに朝が来る　沐天
今日佳き日旗の影ある狭い庭　恒明
新年号に出ている型を暮に縫ひ　景和
新年号にもインテリすねた記事　清潮
新年号本屋ばかりが春になり　三司
新年号どれも名家の一夜漬　梅里
新年号飲んだところへ忘れて来　路郎

雑川　**淀川支部**（大阪市）
一月十一日　武部香林居

一人来ぬ客のうわさで座がはずみ　天貧
皆んな出て一層静かな三ヶ日　都詩子
酒ぬきで寝ようとしても三ヶ日　香林
福笹で顔たゝかれる満員車　六竜子
雪積んだ汽車に帰郷の胸踊る　花村
肩の雪見せて夫は土間に佇ち　博水
常夜燈まばたき交す牡丹雪　若葉

雑川　**日立櫻島支部句会**（大阪市）
一月十三日　於日立造船所　真鍋一瓢報

羽子板を買ふて貰つて飾るだけ　巨船
僕は男羽子板なぞで遊ばない　亀洋
混血と言われ羽子板もちそびれ　一球
ボーナスをさいた羽子板さけられ　花奈女
追ひ羽根を見てゐてこをつかれかけ　芳扇
羽子板が姉の形見のまゝ古び　花代子
ほめられて来た羽子板を抱き歩き　巨船
泣き落しした羽子板を抱いて寝る　早苗
羽子板へ親父の稼ぎうかがわれ　清潮
二本目をつけて女は風呂へ行き　敬秋
引立てて貰ふ賀状を暮に書き　有泉
なぐられて撲つて恋の意地をもち　定美
石燈籠金十円の字が残り　京花
平熱を妻は微熱にして帰り　定行
元旦の土に寝てゐる年始酒　ひさみ
なんぼ下戸でも正月位ひ買つておこ　潮花
羽子板は助六娘抱いて出る　秋花

雑川　**岡山支部句会**（岡山市）
一月十一日　於山陽旅館
（藤本満年御夫妻送別）　大森風来子報

臨検が真の夫婦で恐れ入り　三四詩
くさしつゝ妻の意見を採る積り　夕起
負け惜しみいうて夫の気がなおり　茶々
知らぬ間に箪笥までも似た夫婦　又州
用ダンス一つへ夫婦かくし合い　ただみ
夫婦仲悪くて子供よく生れ　南畸
国際愛カップル雪のように解け　恵二朗
椅子席へ外人夫婦巾をとり　大甲帽
喧嘩には負ける女房で悲なく　秋芳
クリームの移り香のする茶をよばれ　朴仙
用ふれど木暮の顔になつて来ず　満年
クリームが妻の匂いになつて無事　方大

下駄箱も持つて帰れと意地になり　谷水
下駄箱の上に牛乳置いて去に　彌栄
下駄箱へちやんとしまつて帰さぬ気　玉露
下駄箱へ日差が届く温かさ　ペン郎
下駄箱へ片身の狭い下駄を脱ぎ　玲花
下駄箱の上にもあつた池の坊　薫翠
下駄箱へ引率の靴だけ納め　怠坊
下駄箱へ今日の天気を覗いて見　一夫
下駄箱のみんなちびてる風呂へ脱ぎ　聰夢
下駄箱は奉待つこころ嫁くこころ　久米雄
失恋をして銀ブラが趣味となり　のぶや
銀座でも押しも押されもせぬ男　千容
銀座八丁一文無しで歩いて来　一子
東京の土産銀座で箔をつけ　抜山
華かな銀座邪悪と背を合わせ　夜火楼
欲望の盲点を衝く裏銀座　美婦適
老らくの銀ブラがまたけつまづき　青果
夜の馬鹿朝の銀座の霧を吸い　鮎美
銀座に生れて郷愁などもたず　あきら
義理一つ友を銀座の灯に誘い　晴の助
喜びはほたきの先で唄となり　舌郎
喜びのお膳に母の瞼がうるみ　忠美
喜びをさすが無口も包まれず　八ッ茶
栄転の喜びといふ目がうるみ　一糸
見忘れたのも喜びの席にあり　鉄児
初夢はいえないようなものになり　五風
初夢に還らぬ夫生きており　七面山
他愛ない初夢でした年が明け　三林坊
初夢を共同栓へ持つて来る　風来子
地下道で見る初夢がきれいすぎ　千石

雑川　**下關支部句会**（下関市）
一月十五日　於半休門居　石川侃流洞報

自慢した腕が怪しい荷の重み　司楼
釣自慢御馳走丈けの手をたゝき　米三
よいとこえ来たと自慢のさぶを注ぐ　半休門
大根に出口塞いで母忙し　良坊

版写謄田阪
大阪市北区芝田町五二
株式会社　阪田商会
電話　福島五九九一番
五六三一——四番

木登りを褒めて大根かけさせる　ほなみ
独身と言う気がるさにすり大根　みつる
雪解けに靴の踏場所選つて行き　蘇人
昔程叱らぬ父を淋しがり　九呂平
軸のない部屋を勇退淋しがり　藤市
掛軸も今日はめでたく掛替へる　柳鹿
三代目家伝の軸をみな放し　茶人
一本の掛軸で鹿弔相つとめ　土筆坊
為書の遺墨となつて観賞され　半休門

雑川　**小郡支部句会**（山口県）
長野井蛙報

初詣異郷の夫の無事祈り　柳虹
初詣竜頭蛇尾でない覚悟　楽天
宣伝のうまさに一寸立ち止り　一幸
白粉の宣伝になる顔を貸し　井蛙
握り箸つるり〳〵とそばが逃げ　一路
殉職の腕に時計は生きており　峰秀
野良仕事もう昼近い腹時計　○丸
長い針短かい針で子は答え　恒生
初恋は只黙々と歩くだけ　陀螺

雑川　**川棚支部**　**ウイロー社句会**（布哇）
古川魔花麗報

仲人はついでに猫の仔もはかし　細民
世話好きな伯母を又かと敬遠し　保枝女
仲人はただ良縁とほめちぎり　柳葉

仲人が本職らしい話し振り　泉水
仲人にだまされたわと倦怠期　峰雪
スピード時代仲人などは無くもがな　快夢起
諸諸も混ぜて仲人まとめる気　拝山
仲人の口に期待が大きすぎ　友江女
仲人は家の素性も一寸述べ　迷朗
まとまらぬ話仲人まとめる気　魔花麗
仲人の出入へ近所の眼が光り　暁舟
仲人の無い嫁の身は早目立ち　さとみ女
仲人を立てた猫じやあるまいし　旋風
仲人は裡でよいと手軽るそう　亭駒
難航であつたと仲人妻の酌　草一郎
今度はと聞耳立てる嫁きおくれ　緑風
仲人の目に長女次女三女四女　純香
仲人へケアから便りほゝ笑ませ　野渉
仲人の口と知りつゝ夢を抱き　笑有

雑川　**京都支部句会**（京都市）

一月十六日　於仲源寺　村松夢裡報

耳遠き母も笑いの中に笑み　紫闌
ただ餅がふくれただけの娘の笑い　誠史
初笑いゆく先暗き道なれど　絵丘
かくれんぼ小屋の押切恐くなり　豊次
許された試歩この小屋で引き返し　喜由
かんなくづ踏んで番茶のとどく小屋　小秋
不満なほ言へず街録終りなり　義行
言い足りぬ声をマイクが逃げてゆき　草之助
酔ふている方へ録音近づかず　鳥雀
録音へ咳が出そうなインタビュー　折草
録音へお早うといふ嘘があり　みてい
寄宿舎へ母の真心届く冬　好浪
孫抱いてこゝろやすけく陽の温くみ　夢裡
温か味まだあり玉子頬へ当て　竹馬
旅に立つ夫のぬく味の夜具たむ　キヨ
台風の記憶がこわい東風　しげを
京は晴れ祇園へなびくアドバルン　みてい

雑川　**浜寺病院支部句会**（大阪府）

膳所新三報

約束の日の日めくりを折つておき　真麿居
お年寄りが居て旧がある暦掛け　漫多朗
カレンダーを元旦にして床に着き　小雀
大安がまだ巾きかすカレンダー　破魔坊
カレンダー全治の年であつてくれ　冬水
斗病に薬局の暦ぶら下り　那利
カレンダーを子の背のとどくところにつり　浜小
貧しくも他所には負けぬカレンダー　青嵐
カレンダー掛け替え除夜の鐘を待ち　真砂
お歳暮に広告兼ねた暦来る　文糖
カレンダー今年も同じ位置に掛け　楓士
人生五十年暦めくつたやうに経ち　新三
斗病に二度目のカレンダーぶらさげる　座頭
何時見ても挨拶してるカレンダー　白蛾
朝寝する隣の女素性祕め　眉山
朝寝してプラン変つた公休日　熱園
朝寝する筈の休みにベルが鳴り　横寿喜
松の内小糠三合の朝寝坊　橋村
朝寝坊たまの早起きひやかされ　正一
朝礼えこそこそ入る朝寝坊　桂月
嫁けば又其気に成るわと朝寝坊　雲碧水
日曜日朝寝する気を子が起し　紫雲
寝に居て朝寝が朝寝ゆり起し　溪泉
空洞が共鳴しそうな除夜の鐘　黒ん坊

雑川　**堺支部句会**（堺市）

一月二十三日　於八木摩天郎居　八木摩天郎報

鼻唄のまゝ御無沙汰の電話口　凡九郎
信心に鼻唄と言ふお題目　貴山
特ダネの写真が少し若すぎる　梅志
特ダネをカメラは同じ向きで撮り　夢遊
セットしてその小娘と張り合う気　水客
若返り白粉焼けの過去を悔ひ　香林
反りはしが見えて親の手振りはなし　小松園
反り橋を渡つて土産一つ出来　雄声
太鼓橋こんどは降りる声になり　潮花
同権になつても男酔ふて来る　今雨
闘病のベットにたんと鶴を折る　羅生
初日の出鶴は二三歩又一歩　一瓢
松に鶴掛けて本家の祝いごと　香林
鶏群の君一鶴になり給へ　摩天郎
鶴の一声愚痴も意見も押えつけ　淡舟
鶴の間の几張のかげはなほくく　葭乃
孝行を美談にすれば腹を立て　葉光
匿名の義金に一家よみがへり　鹿の子
表彰の美談の主へ来るマイク　笠人
貧に居て拾うた金に手をつけず　路郎

雑川　**大聖寺支部句会**（石川県）

一月十四日　於那谷光郎居　野村味平報

採用の日からズボンの折目立ち　味平
あきらめた頃に採用の便りくる　明石
母なればこその為替が這入て居　光郎
御持参で足らぬ風呂敷一つ借り　同
風呂敷も時にとりての片たすき　桃園
風呂敷の結びがとけぬ子の使ひ　魯木
風呂敷もお貸ししますと妻は立つ　とよ
先生をめぐつて女医にあるしつと　酔羊
軽息を見合いだつたと女医気付き　笑平
子の病気女医母としてちとあわて　雅子
モヒ中を黙つて帰す女医の腕　芳子

雑川　**みおつくし川柳会**（大阪市）

於天王寺中学・　戸田古方報

茶話会で顔と名簿を見較べる　正人
茶話会へ色気まだ〳〵雀の子　凡九郎
茶話会の菓子へ司会の長すぎる　昇
茶話会のみかんボケツでふくらませ　古方
ボーナスでスキトホームたのしさう　敬子

雑川　**南海電鐵川柳会**（大阪市）

友淵貴山報

冗談も言えぬと飲んだ仲直り　貴山
芸者してた頃にもらつた名士の書　路郎
間違つてゐたを喜劇で教えられ　香林
喜劇なら判る田舎の父を連れ　淡舟
昔話フンと子供聞きもせず　伯州
改札をそわ〳〵と出て怪しまれ　雄声
湯の街の改札女将顔がきき　摩天郎
姑がまたも昔の例をひき　幽王

雑川　**淡海荘川柳会**（兵庫県）

一月十日　於応接室　原田つとむ報

外泊の慾しさに咳もかくしとき　たけし
初風呂は首だけ出しておめでとう　貞良
年賀状一票せしめる下心　一睡
初風呂え晴着で行きたい子をなだめ　たんぽぽ
初風呂もしんどいだけの子沢山　つとむ
下心ありとは知らず招かれる　草右

柳界展望

▲本社二月句会は七日午後五時半から下寺町の光明寺で開催▲南区医師会文化部杏林川柳会は二月十七日午後七時から捨舟居で開催。▲大阪逓信病院川柳会は二月廿一日午後二時から三階図書室で開催▲南海電鉄川柳会は二月二十三日午後六時から粉浜の親和寮で開催以上何れも路郎主幹出席▲川雑支部句会は一月十五日半休門居に於て開催▲川雑姫路支部は一月十八日夜堀氏宅で開催▲川雑句会部の打合会が二月十日夜、本社で開かれ文蝶、潮花、紫香、一瓢の諸氏が集つた。▲八代川柳会(八代市)では創立七周年紀念川柳大会を四月五日に開催する由、会場は未定。なおこの日を期して八代宮か松井神社境内に田中辰二氏の句碑建設のことが議せられていると。出来るだけ立派な句碑であることを期待したい。▲東川連第三回川柳大会兼新川柳興立五十年紀念の全国川柳競吟大会が一月廿五日正午から東京都渋谷区元広尾ノ上宮寺広間で開催▲杏林句集「みなみ」が大阪市南区医師会文化部川柳同好会から一月廿日に発行された。非売品。▲石曾根民郎著「川柳手ほどき」が松本市大名町のしなの川柳社から一月五日刊行、A6判四〇頁、定価五〇(〒共)▲宮城亜亭氏(京都府)は還暦紀念「六十のとびら」を一月下旬に刊行された。還暦は昨年で、六十のとびらは自伝で角形の洒落れたもの。非売品。▲高島玉兎郎氏が一月十五日疎開地の長野県伊那郡で永眠された行年六十四才謹んで悼む▲神尾三休氏が一月十三日肝臓癌のため北海道亀田郡大野村の自宅で亡なられた享年七十一歳、氏は北海道柳界の元老として畏敬されていた。謹悼。▲上田芝有氏(大阪市)が肝臓癌のため二月十日午後八時死去された。五十八歳。告別式は十六日午後二時から四天寺本坊で修営。▲高岡薫氏は京都市右京区太秦安養子面影町十一中川方へ転居▲竹村よか楼氏(大阪市)は紅蕉と改号▲落合六文銭氏(東京都)は行詩堂と改号▲米沢暁明氏(愛媛県)は一月廿六日土佐の桂浜の展望台から「眺望の邪魔と伐られた松の蕊」の句信を寄せられた▲岩川寛虚氏は愛知県知多郡大府町大府荘一ノ一〇へ転居。

正誤

▼前号一二頁執筆者四人目、名曾根民郎は石曾根民郎の誤り

社の黒板

各地柳壇句報の事

各地柳壇の句報は句会が済んだ直ぐ翌日に清記して、開封で送り届けていただきたい。締切までまだ日があるなどと思つていると乗り遅れるので特に注意されたい。

柳界展望記事は

要点を具備する事

会を開いた記事は会の名、開いた日時、場所、会場等を漏らさぬよう、いつ何処で開いたのか不明では報道しかねるのでよく注意していただきたい。

用件が違つたら別紙に

原稿の同封は差支えないが、用件が違うごとに必ず別紙に書くこと、句稿の端に、用件が書いてある場合には、用件を読まずに、句稿袋に入れてしまう場合があり、選の時に気がついても時日が経過するので用件ごとに別紙に書くことを厳守してもらいたい。

飛・燕・往・來

前田伍健(松山市)より ——社宛

「川柳雑誌」二月号手早く充実の御発行うれしく拝受厚く御礼申上ます。山雨楼さんの病床文学いよ〳〵恐ろしき迄に発揮敬服と共に又心配して居ります。故俳優井上正夫丈の像の除幕式も近づきました。先日は柳原極堂翁(八十七才子規の友人)と対談芭蕉の母も伊予人、伊予人と俳句につき(川柳も)快談でした。

麻生路郎先生川柳生活五十年紀念

短冊展

期間 三月三日—十五日

会場 アベノ近鉄百貨店七階

★川柳界の巨匠麻生路郎先生の川柳生活五十年祝賀紀念の第二企画(第一企画として曩に詩像を贈呈)として先生の名吟佳什を弘く世に鑑賞していただくため、短冊展をアベノ近鉄百貨店に於て華々しく開催することとなりました。先生は能筆家として有名で、その揮毫の妙趣は柳壇の至宝と謳われているところでありますが、興が湧かねば決して筆を手にされぬと云う、所謂名人氣質なので今回の此の企ては大方各位から大変欣んでいただける事と自負いたして居ります。★なほ各界(画・詩・歌・俳・柳)名流の協賛作品の御出品を仰いで錦上花を添えるの豪華短冊展を展覧することにいたしましたので、此の好機を逸しられぬよう特にお運びを願い上げます。

★周知の如く先生は一身を堵して川柳の社会化に盡瘁されると共に革新的作品の発表によつて、やゝもすれば低俗化せんとする川柳を藝術的に昇華し川柳の面目を一新されたので、曩に大阪府知事から文藝賞を授與せられたこともあり、柳界に於ける御功績は枚挙にいとまがありませんので省略いたします。

★会場には投句函を設けてあります。・入賞句呈賞

大阪市住吉区万代西五ノ二五

主催 川柳不朽洞會

理事長 中島生々庵

なお引続き下記の祝賀紀念事業を行い、先生多年の御功績にお酬いしたいので全国川柳人は勿論大方各位の御支援を特にお願いする。

★路郎句集「旅人」の上梓★川柳生流五十年紀念祝賀川柳大会★紀念放送★不朽洞書齋建設

事業内容の詳細は逐次発表

編輯局にて

▼日本の南の端ではもう桜が咲いて花見をしているそうだが、こちらでは梅がよう〳〵ほころびかけたところだ。二月の初旬に枚岡の梅林の走りを味いに出かけて見たが、寒いばかりで誰一人来ていない。茶店などは堅くとざされたままだつた。しかしボツ〳〵春めいて来たので、いくら寒いと云つてももう暦である。二月と云う月は廿八日しかないので（昔からではあるが）雑誌を持つてるものにとつては格別気ぜわしい月である▼新年号の鼎談は素晴しい。モツトやれ〳〵とケシをかけられたので、阿呆正直に本号もテイ談を提供することにした。生々庵、方正、春巣の三医博を煩わして「川柳から観た医者の内幕」を談してもらつた▼東野大八氏は、戦時中の体験談「哀妻物語」を寄せられた。詩人ジヤーナリストの告白文学には一読ホロリとさせられるものがある。本号の好読物として御愛読が願えると信ずる▼別欄不朽洞会の広告のように、三月の三日からアベノ近鉄百貨店で私の短冊展（軸や額やその他の余技も）を催していただくことになつたので私の手は幾つあつても足りない現状である。しかしガン張れる限りガン張つて行くつもりだ。やる以上は少し観られるものにしたいと思つている。ワンサと押してかけて来て、張合いのあるものにしていただきたい。会場に投句函をそなえつけて、名句に短冊でも差上げたいと思つている。（路）

▼中島生々庵博士（大阪市）は一月三十一日の夜行で夫人同伴、岳父の法事で東上

不朽洞会から

二月二日に帰阪された。▼筆山快夢起氏（ホノル、市）はハワイタイムス新年号へ随筆「マイナと私」を執筆され、同紙へ応募川柳「生」の選評をされている。▼戸倉普天氏（兵庫県）は令息仁一郎博士がアメリカのデューク・ユニバシテイに招かれ渡米されたので留守宅の面倒も見ねばならぬので一段と忙しくなられた由▼水谷鮎美氏（尼崎市）のお宅へ去る一月二十八日深夜泥棒が侵入タンス一本の中味全部が朝になつて盗られた事を発見家内一同ボカンとせられた由お見舞申上げる▼大西野介氏（大阪市）は旧蠟肝臓炎で阿倍野橋の鳥潟病院に入院せられ一時重態を伝えられたが最近大分良くなられた一日も早く全快せられん事を祈る。▼福田山雨楼氏（横浜市）はその後快調で、もう少しでペンがとれると思い自重しているとのお便りに接した。▼福島鉄児氏（岡山県）の通信によると、一月十五日の成人の日に弓削高等学校から三年生と職員に柳話の依頼があつたので七面山氏を煩わしたと、なお当日学生によつて川柳劇を演ずることになり小畑自由朗氏作「惜しい句が」（本誌元号掲載）を上演した。▼延永忠美氏（岡山市）は年末の風邪を持ち越されたが一月下旬にとう〳〵臥床された。▼河村日満子氏（鳥取市）は令閨の病臥で心痛されていたが漸く床上げをされたとのこと、日満と改号された。▼阿万万滴氏（大阪府）は旧号万的に改号された。▼藤本満年、藤本茶々夫妻は一月廿六日列車瀬戸号に久米雄、風来子、忠美、十九平、鉄児の不朽洞会員諸氏並に駅長天竜氏等に見送られて岡山駅から東上された。▼大森風来子氏（岡山市）は一月三十一日には柵原鉱業所の川柳句会指導のため一泊がけで出向かれた。▼上田春柳氏（大阪市）の厳父が骨折臥床歩行不能のまゝ衰弱が甚しいとのこと心痛のほどお察し申上げる。▼古川魔花麗氏（ホノル、市）は布哇報知新年号の募集川柳「二た昔」の選評を同紙一月一日号に発表された。▼中内翠芳氏（大阪市）は一身上の都合で二月末限りで不朽洞会員を辞された。▼高山朗笑氏（岡山県）は家事の都合で二月末限りで退会された。

新会員紹介

一月

森本法泉子（鳥取市）正　鉄州氏推薦

中島兎庵（大阪市）正　生々庵氏推薦

二月

佐野牛歩（大阪市）正　潮花氏推薦

川柳とBK

★BK川柳の会では、放送川柳募集の二八年度の選者を下記九選者に依嘱した。放送予定プロ並に、募集規定は次の通り。

放送日	課題	選者
四月十二日	「入　学」	岸本　水府
五月　十　日	「掃　除」	椙元　紋太
六月十四日	「浴　衣」	麻生　路郎
七月十二日	「思い出」	近江　砂人
八月　九　日	「団　扇」	増井不二也
九月十三日	「ハイキング」	北川　春巣
十月十一日	「平社員」	岸本　水府
十月　八　日	「　水　」	椙元　紋太
十三月十三日	「借　金」	麻生　路郎
一月　十　日	「雑　談」	生島　鳥語
二月十四日	「　頭　」	延原句沙彌
三月十四日	「卒　業」	西尾　栗

締切—放送月の前月末日迄の到着便で投句を締切る。

応募句数—一枚の葉書に三句以内

賞—入選三人（各五百円）

入選三人、佳作十五人、全部に選評プリント贈呈

投句先—大阪市東局区内馬場町大阪中央放送局〃BK川柳の会〃

発表—毎月第二日曜日の午前九時十五分「趣味のしおりの時間」

募集

課題吟募集

ピクニック（十句）武部若菜選
乳母車（十句）麻生梨里選（三月二十日締切）
里帰り（十句）尼　緑之助選
看護婦（十句）大森風来子選（四月廿日締切）

毎號募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究　感想其他）（毎月廿日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

（載轉禁）

B列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　第八卷　第三号

定価　四〇円
送料（四円）
半ヶ年　二六四円
一ヶ年　五二八円

昭和廿八年二月廿五日印刷
昭和廿八年三月一日発行

印刷兼発行人　大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地　麻生幸一郎

発行所　大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地　川柳雑誌社　振替口座　大阪七五〇五〇

THE SENRYU ZASSHI

NO・310

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

生活と文化を
むすぶ
マツサカヤ

結婚式場 長生殿 6階
美容・着付から披露宴まで
文化クラブ 7階
藝術の綜合文化センター
松坂会館 7階
洗練された藝術ホール
お好み食堂 7階
洗練された味覚と藝術
松坂パーク 屋上
日本一の完備した施設

松坂屋
大阪日本橋
電南 1171

もっと速く もっと便利に…
とのご期待に應えて
名古屋ー大阪 特急 2時間55分
名古屋発 八・〇〇 一二・〇〇 一六・〇〇 一八・〇〇
大阪上六発 九・〇〇 一二・〇〇 一四・〇〇 一六・〇〇
毎時発行はこの他 60分ごと運行
近畿日本鉄道

酒販用 紙コップ
食堂用 紙製品一切

アイスクリームは
堅牢で衛生的なこの容器で

特殊紙器工業株式會社
フタバカップ株式會社
大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 代表 (66) 2905 2903

避妊には…
ゼリー剤を!

★際ける時間がいらず速効且つ確実で連用しても無害
★注入器で膣内へ送るか、タンポンに塗り御使用を!

サンシーゼリー

1箱 2 太郎 3 サンシー

円四料送 圓拾四價定 誌雜柳川 號〇一三第